



355
725



始



特230
700

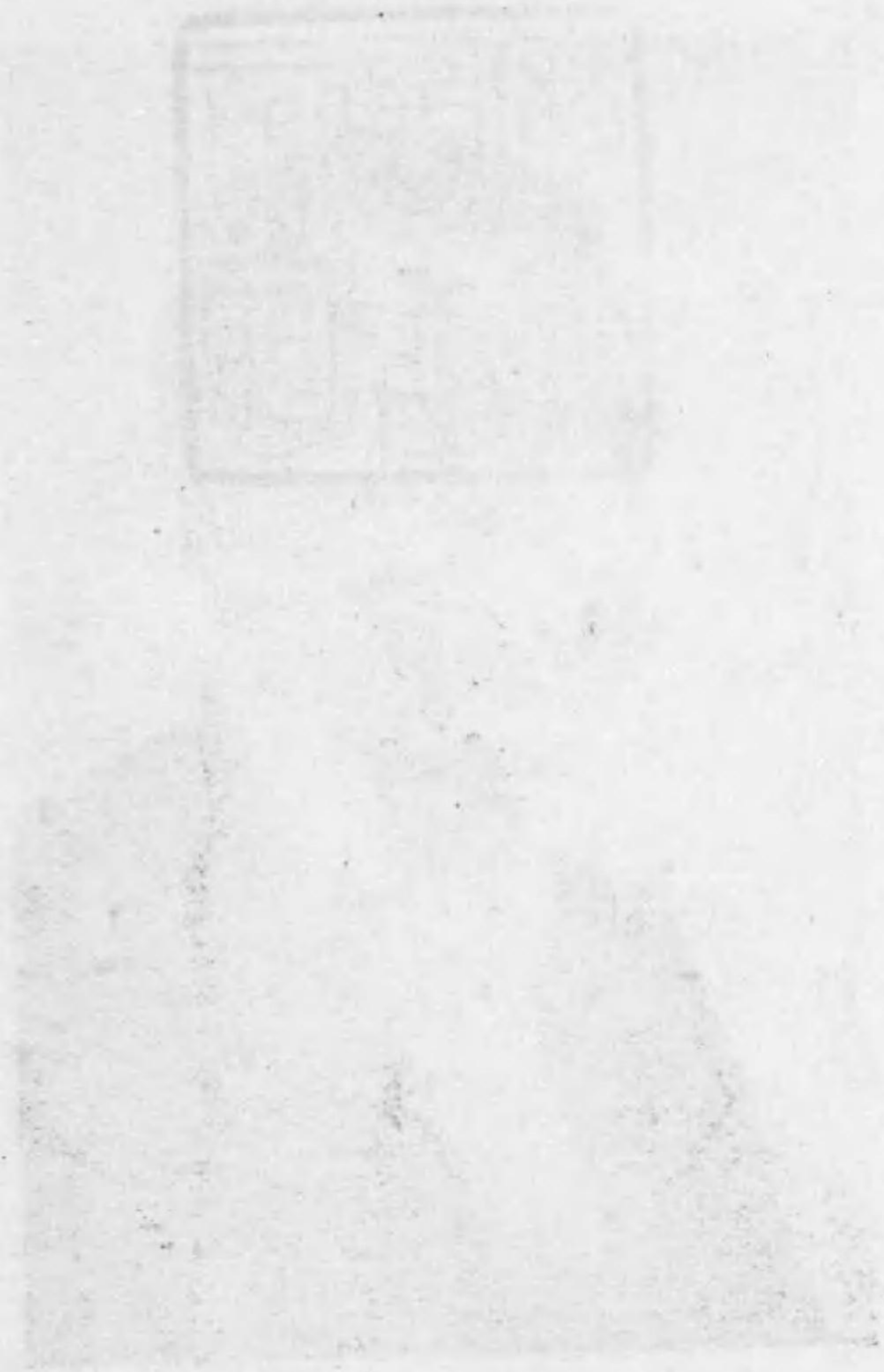


靈玉齋
命觀





著者小照



序 文

青年よ、吾が説く處は佛教にあらず、耶蘇教にあらず、儒教にあらず、道教にあらず、回教にあらず、別に信仰の新天地を開發して眞理の光明に入れり。敢て新宗教と云はず、新哲學と云はず、唯是れ絶對靈命のリベレーション也。

青年よ、三千年傳來の凡ての教義は、現代の信仰を繋ぐ能はず、焉んぞ現代の生靈を救ふに足らん

二
や。世は神人の絶大なる靈觀と清新なる信仰の興隆を求む。靈命の眞理は即ち能くこの要望に答へ、凡ての迷妄と不信を一掃して、宇宙人生の開達を成就せん。

青年よ、行け、世の爲め人の爲め、到る處に靈命の眞理を宣傳せよ。學者も無學者もみな共に迷妄と不信の死海に漂へるを見ずや。諸國を遍遊して凡ての人に靈命の眞理を聞かしめよ。説いて一人を信ぜしむるは萬人の生靈を救ふ所以也。

青年よ、靈命の眞理の爲めに善闘努力せよ、最勝なるものは靈命の眞理なり、茲に無窮の生命と、永劫の勝利あり。

道通太極得靈仁 宇宙之間我獨眞

孔老佛耶今已滅 衆生只合觀神人

松本君平

本著は明治四十四年九月十五日上梓、當時宮内大臣を経て

天皇

皇后兩陛下

皇太子殿下

に獻納、天覽を賜ひしものにして、今回更に増補訂正をなし發刊せしもの也

著者

目次

靈	命	第	一	三
宇	宙	第	二	五
因	果	第	三	七
兩	極	第	四	九
現	世	第	五	一
生	死	第	六	二
病	苦	第	七	三

靈
命
觀

目
次

死 後 第 八	一五
靈 觀 第 九	一七

二

靈命第一

冥々たる宇宙、漠々たる天地、萬物磅礴たり。我れ此間に生じ形骸を保有し、五官を具足す。耳目聰明にして手足運用す。物に接し象に應じ、喜怒哀樂の感情を表現し、念想生動の意心を開呈す。皇々喬々として體魄に宅據し、處として存せざる無く、處として附せざる無く、未だ紀極する所有らず。勃鬱たる感情、偉鉅たる意心、是の如く滋繁なり。我れ洵に

之を體驗するに此の感情意心果して何れより發動し來る乎。

凝神靜慮、深く吾が情心發動の根源を省察するに吾が形骸の裡、至精至極、微妙莫測なる靈力の潜在するものあるを觀る。物之に接して喜怒哀樂の感情を發し、象之に對して念想生動の意心を動す。其の感情の發する所、其の意心の動する所、千狀萬態窮極なしと雖も、然かも悉く是れ潜在靈力の發動せる形相に外ならず。靈力とは維れ果して何物

ぞ。此の靈力の本體は卽是れ「自我」の本體也。吾が感情意心の本體也。吾が生身命根の本體也。之を名けて靈命と云ふ。

靈命は之を視て色無く、之を聽て聲無く、之に觸て體無く、之を測て形無し。而して閔潤幽玄、衆妙包蘊、能力の極まる所、方物す可からず、焉んぞ亦端倪するを得ん。然れども我れ吾が恒幹を觀ずれば、澄然淵然として此の靈能妙力の充周流行するを知る。然らば則ち靈命は我が形骸の何處に潜在する

や。

吾が四肢五臓を運使し、耳目口鼻の妙用を司る者は吾が腦髓の活動也。腦髓は吾が身神の靈坐也。解剖學者ありて若し吾が腦髓を檢察すれば、恐らくは、唯だ混沌たる灰白纖維の一物質を見ん。何人か能く其眞意義を洞徹するものぞ。然れども我れ一度び自ら内に省みて吾が眞を驗ずれば、喜怒哀樂、念想生動、億萬千無量數の吾が感情意心自から此の中に藏蓄せる驚嘆靈妙の一大世界を發見す

べし。之れ即ち吾が靈命の天地也。内省すれば則ち靈命を觀る可く、外察すれば則ち物類を見るべし。我れ吾が靈命を信ずるは、我れ自ら之を内に觀するに因る也。他は固より我れたること能はず。我れたること能はざるの故に吾を自觀するを得ず。我れ只だ吾が自觀に因て靈命を觀ずるを得る而已。

他は我たること能はず、我れ亦た他たることを得ず。吾れ既に他たることを得ず、爰んぞ他の自觀

を爲すことを得んや。今ま我れ他を外觀すれば唯だ形骸ある一物類の蠢動するを見る。靈命の果して他に存するや、我れ固より之を觀ずるに由なし。他徒だ我と形骸を等うし、我と喜怒哀樂の情を等うし、我と念想生動の心を等うするものあるの故に、他亦た我れと等しく其形骸の裡、靈命の潜在するを類推するみの。吾れの他を觀る是の如く、他の我れを見る亦た猶ほ是の如し。他の自觀を以て我れを推想する、亦猶ほ我が自觀を以て他を類推す

るが如し。而して我れ能く此の類想推理の誤らざるを知る。吾れ是に因て自他人類に靈命あるを信じて疑はざる也。

之を禽獸蟲魚一切の動物に觀よ。其の搏逐して而して游息するや、必らずしも人類と其状態を同うせず。其の感情意心亦た必らずしも人類と等しからず。然りと雖も其喜怒哀樂、念想生動の表現、迺ち之れ無しと謂ふを得ざる也。夫れ既に禽獸蟲魚一切の動物に此の感情意心の表現ありとせば、則

ち其の由來する所を考察し、其の情心發動の本源に於て、必らず靈力の潜在するものあるを疑ふ能はざる也。是れ一切の動物に靈命あるを彰明するものに非ずや。乃ち我は自他人類の自觀を以て之を禽獸蟲魚一切の動物に推想して、其の靈命の潜在するを信ぜざるを得ざる也。

更に之を樹木草苔に觀よ。渠の樹木草苔は人類の如き智慧有るに非ず。又禽獸蟲魚一切動物の如き感覺表情有るに非ず。其の發情動心の機關闕焉

として之を有せず。然れども春風駘蕩、人悦び鳥歌ふの時に於て、則ち百花爛熳たり、秋雨蕭條、人傷しみ蟲啼くの候に於て、則ち千葉黃落す。是れ樹木草苔の盛衰榮枯に非ずや。風雨寒暑の變に應じて盛衰榮枯の理を示すもの、之れ一切植物の發情動心の表現也。既に植物に發情動心の表現ありとせば、其發情動心は樹木草苔の裡に潜在する靈力發動の形相を示すものに非ずして何ぞや。我れ此の理を推究して樹木草苔一切の植物に靈命あるを信

じて疑はざる也。既に禽獸蟲魚一切動物に靈命あるを信ずるを得ば、爰んぞ樹木草苔に靈命あるを怪しむの理あらんや。況んや人類と禽獸蟲魚との差別は禽獸蟲魚と樹木草苔との差別に比して必ずしも徑庭なきに於てをや。

更に進んで之を金石土芥に觀よ。彼の頑然として天地の間に賦形するもの、固より自他人類、禽獸蟲魚一切動物の感覺生動するが如くならず。又樹木草苔の四時更變、盛衰榮枯するが如くならずと

雖も、然かも金石土芥、一切の物彙は、皆な無量數の微分質を以て成り、相合し、相聚つて一團を成し、而して靈妙莫測の力を其中に含有する者也。此靈力は發して或は凝聚力となり、或は和親力となり、或は求引力となる。譬へば膠漆の凝結するが如く、酸水兩質の和合するが如く、鐵磁二物の求引するが如し。是れ抑も何物ぞや。其物に對し象に應じて、或は凝聚し、或は和親し、或は求引し、其力自から強弱疎密の度を異にする所以は、之れ物類の發情動心

の現相に非ずして何ぞや。

人類禽獸一切の動物にあつては、其力は喜怒哀樂、念想生動の情心となつて表現し、樹木草苔一切の植物にあつては、其力は盛衰榮枯の變更となつて表現し、金石土芥一切の物類にあつては、其力は凝聚、和親、求引の作用となつて表現す。其の表現する形象や等しからずと雖も、同じく之れ其裡に潜在する靈能妙力の發動たるに至つては則ち其義を一にするもの也。已に一切の物類に此の靈能妙

力の存在するを知らば、又た爰んぞ靈命の物類に潜在するを疑ふを得んや。

且つ夫れ金石土芥一切の物類を形成する原質は、不息無休の努力を以て聚散離合する者、亦た將に百千萬億年を閲して而して消長變化せんとす。即ち其の人類禽獸の死生存亡と、樹木草苔の榮枯盛衰と、又た其の理を一にする也。死生存亡と謂ひ、榮枯盛衰と謂ひ、消長變化と謂ふ、無窮永劫の眼を以て之を視れば終に一に歸し而して差別無き者

也。

人の金石土芥を以て物類と爲すは人より之を觀たる也。我れに靈命あり、我れ之を自觀するを得べし。金石土芥靈命あり、又何ぞ之を自觀す可からざらんや。金石土芥より人を觀ば、人も亦た物類に過ぎざる也。故に靈命は自自觀の結果也。物類は自他觀の結果也。靈命物類は一にして二、二にして而して一なる者也。故に之を自觀すれば即ち是れ靈命觀。之を他觀すれば即ち是れ物類觀。

夫れ人類、禽獸、草木、水土、無量數の諸物を戴藏するものは地球也。地球は塊然たる一大個體、固より人類の如き形態、要素、細胞、組織、機關、蛋白質、神經系統を有せずと雖も、其の萬物を戴藏し、兆類を化育し、百千萬億年太陽の周圍を廻轉して、四時嘗て其序を破らざる所以のものは、地球の靈能妙力に非ずや。其の構造の雄大にして正確なる、其目的の高遠にして莊嚴なる驚嘆に勝へざる所也。抑も此の大能大力は何れより來るか。蓋し地球に潜在する

靈力の發動に非ずして何ぞや。我れ之を以て地球に靈命あるを信じて疑はざる也。

更に此の理を推究尋繹して日月星辰に及べば、則ち更に大なる靈命の存在するを知らん。之れ毫も疑ふ可からざる所なり。

宇宙とは何ぞや。宇宙は無量無邊、至久極遠にして、文字言説の能く施設する所に非ず。蒼々焉、茫茫焉、天にあつては日月星辰、雷霆風雨を見、地にあつては山河草木、人畜諸物を見る。概念して之を宇宙

と云ふ。宇宙は萬有を包容して尙ほ餘あり。宇宙の大を以て地球を見れば大空の一纖塵にも及ばざる也。宇宙の久を以て千萬億年を見れば、一息一瞬の間に過ぎざる也。

今ま我れ宇宙を概念して之を他觀すれば、則ち萬有の現象を観る可し。萬有の現象を綜合渾一して之を自觀すれば、則ち宇宙絶對無限の大靈命を融會悟入すべし。是れ猶ほ我が自觀に因て吾が靈命を観るが如き也。宇宙絶對の大靈命は、則ち宇宙

大我の本體也。宇宙靈能妙力の本體也。宇宙生身命根の本體也。宇宙眞理道德の本體也。宇宙一切萬有は、盡く此大靈命より發化長進し來たる者也。宇宙萬有の實相は盡く是れ靈命の發象に非らざるはなし。曰く人類、曰く禽獸、曰く草木、曰く金石、或は曰く動物、曰く植物、曰く礦物、或は曰く生物、曰く無生物、或は曰く有機物、曰く無機物、其名異りと雖も固と是れ現相に因て差別を爲すの言たるのみ。萬有の靈命は一列也。最下低度より最上高度に至る、其

間無量數の差別階級あり。靈命の階級其度を高上するに隨つて、其の能力は愈よ善美なるを致し、其の喜怒哀樂の感情、念想生動の意心、愈よ明確に發露し、而して其形態、組織、機關も亦た愈よ美妙具足するに至る。

靈命の階級、次第に下降するに隨つて、其の能力は愈よ賤劣を加へ、其の形態、組織、機關は益單純不備となり、其の感情意心亦た見る可からざるに至る。之を稱して物質と云ひ、或は無生物と云ふ。然れ

ども之れ固より靈命の潜在せざるに非ず。唯だ明々白々なる表情動心の機關を具備せざるの故に一見之を認むること能はざるのみ。

人類靈命は萬有の中に於て固より高級の地位を有す。而して人類の中に明塞賢愚、善惡正邪、貴賤長幼、大小強弱、無量數の差別階級あり。禽獸、蟲魚、樹木、草苔、金石、土芥、一切萬有にも亦た一々無量數の差別階級あり。即ち一切萬有に無量數の差別階級ある所以は、一切萬有の靈命に無量數の差別階級

あるの故也。一切萬有の靈命に無量數の差別階級ある所以は、靈命の能力に無量數の差別階級あるの故也。靈命の能力に無量數の差別階級ある所以は、靈命の努力に無量數の差別階級あるの故也。

夫れ靈命の力なるものは靈命自己の意思也。精神也。一切靈命は皆な自ら活動し自ら決定するの力を有す。故に一切萬有の靈命は皆な其の意思を以て自己を化現し、以て自己を進展開發せんと欲する者也。靈命の自己を化現するや、必らず形骸を

造作せざる可からず、形骸は自己を化現するには必要なる機關なれば也。靈命の意思は此の機關に由て表現せられ、其の活動は之に由て現實せらる可し。礦物と云ひ、植物と云ひ、動物と云ひ、將た人類と云ひ、宇宙一切の萬有諸物は、各其靈命の意思に應じて化現せられたる形也。

宇宙一切の諸靈命は、自己を化現せんと欲するが爲に、不息不休の努力を以て先づ其の形骸を造作す。是の時に當て一靈命は必らず他物を藉つて

以て自己を營造せざるを得ず。而して他物を攝取するの功是に於て生ず焉。宇宙萬物同じく靈命あり。同じく形骸あり。即ち同じく是の形骸を造營するの趨向あり。人類の他物に於ける猶ほ他物の他物に於けるが如き也。

靈命の他物を攝取するや、他物の吾が用を爲すに足るを以て也。之を攝取すと雖も我は自ら我れたり、他物は自ら他物たるに終らば、他物を攝取するの功無き也。故に靈命の他物に於ける、必らず他

物をして他物に終らざらしむ。即ち攝取せる他物は。靈命の意思を以て之を同化し、自己の形骸を造作するに適應せしむ。譬へば匠人の室を築くが如し。竹木を採り、土石を運び、之を規するに繩墨を以てし、之を矩すに刀鋸を以てし、忽ちにして巍然として室を成す。人但だ其の室たるを知て而して復た竹木土石たるを知らざるは、竹木土石の既に匠人の用たるを以て也。

夫の土壤を觀ずや。一粟の塵、一滴の水、一息の氣、

夫の殆んど目睹る可からず、手觸る可からざる諸多の物質を聚めて之を合し、而して土壤始めて塊然として形を成す。又た夫の草木を觀ずや。土壤に托して以て生じ、土壤の營造する所の者を攝取して而して之を營造し、土壤を挺して而して出て、土壤の未だ營造せざる所の者を舉げて而して更に之を營造し、其根を盤し、其幹を樹し、其枝葉を布擴す。是に於て草木あり。禽獸も亦た是の如き也。土壤草木なくんば、即ち翼して而して飛び、足して而し

て走る者、亦た跡を天下に絶たん。

人に至つては水土鍾まり、菽米薦み、犠牲奉ず。凡そ土芥、草木、禽獸、蟲魚の天地の間に營造する者、一として人の營造に攝せざる者無し。而して人の營造する所のもの獨り精たり。故に人の靈命獨り純たる也。人の萬物の靈たる是に於て見る可き也。然れども生の理たる迺ち環形にして螺形に非ず。人能く萬物を離れて而して獨り生ぜず。萬物亦た萬物を離れて而して獨り生ぜず。骨骸の燐、溲勃の窒

素、氣息の炭酸瓦斯、之を動物に棄つる者、之を植物に收む。落紅の泥に化し、喬木の炭と成る、之を植物に棄つる者、之を環物に收む。是の如く天地萬有、循環大千、週うして而して復た始む。天地の間一として無用の者無き也。此の若くに非ざれば則ち靈命用ふる所なく、形骸自ら成るなし。宇宙萬物、且つ無有に歸する也。蓋し萬有一切の靈命は其の進轉開發の爲めに互に相攝取し互に相貢獻す。此れ靈命貢獻の宇宙大律の繚立する所也。

夫れ靈命の努力せる者は靈命の優秀なる者也。優秀なる高級靈命は、必らず徳あり、威あり、智あり、能あり。則ち之を以て下級靈命を自己に攝取し集合し牽引し、之を藉て以て自己を化現し自己の意思を開展せんとす。然れども萬有靈命皆な自己を保存し自己を開展せんと欲する意思あり。優者獨り生を樂しむに非ず、劣者亦た死を甘ずるに非ず。是に於て意思の力争起り、而して優劣の得喪生ず。茲に犠牲あり、茲に貢獻あり。苟も之を慈愛するの

仁、之を攝取するの義、之を啓發するの智、之を犠牲するの勇あるに非ざれば、優者仍ほ以て優たるに足らざる也。是に努力無くんば是に貢獻なき也。此に貢獻あつて而して此に靈命の進轉發皇ある也。苟も靈命の進轉發皇に益あらば、則ち皆な是れ正義也。故に靈命を退轉昏塞す可き一切の所業は是れ罪惡也。

靈命の階級高貴なれば、自己を化現すべき必要なる機關も亦た美妙完全ならざる可からず。靈命

の機關は、則ち形骸にして其所居の府也。朝に廟堂あり、野に蓬華あり。大人君子は宗屋を美にし、臺樹を壯にす。門楣の光、堂構の新を見て、主人の福を見るべし。靈命の形骸に於ける亦た是の如き也。靈命は見る可からず、或は之を形骸に見るを得べし。形骸の事、忽諸に附す可からざる也。

人の靈命にして自ら開發する意思無くんば、則ち己む。人にして自己を化現し、其の靈命を啓發せんと欲せば、其の能力(感情意心)を表現するが爲め

に、善美なる形骸を造作せざる可からず。微妙なる五感の作用を有せる形骸造營は、人類靈命の進轉發皇の爲めに最も喫緊の事業なりとす。故に其の形骸を殘賊するは靈命の進轉發皇を殘賊するものにして、是の如き一切の所業は罪惡也。

現代人類が善美なる形骸を造作するに臻りたる所以は、則ち人類靈命が過去幾千萬億劫、無量數の努力善闘を成就し來りたるに縁る。而して人に聖賢昏塞の分るゝ所以は、其の靈命の努力如何に

由つて決定せるもの也。靈命の努力善闘益々旺盛なれば、則ち其の進轉發皇は愈よ高貴なるを致す。靈命の進轉發皇愈よ高貴なれば、則ち其の能力は更に益々雄大滂湃涯涘あるなし。德也、聖也、賢也、智也、勇也、皆な靈命の努力を藉て而して神秘莫測の能力を得たる者也。

人類靈命の進轉發皇には努力善闘を要す。大なる努力ある處には、必らず靈命の大なる發皇あり。大なる善闘ある處には、必らず靈命の大なる進轉

あり。靈命の進轉發皇、玄妙の境に達せば、其知は則ち宇宙大法の眞理と一致し、其神は則ち絶對靈命に融合し、聞かざる所なく、知らざる所なく、見ざる所なく、通ぜざる處なく、其の極を窮めて而して思議す可からず。德聖圓滿、神人は即ち是也。

宇宙第二

大時劫は幽遠無窮也。大虚空は曠大無邊也。幽遠無窮の大時劫は宇宙の壽也。曠大無邊の大虚空は宇宙の形也。無量無限の宇宙は唯だ吾が靈命の神明を以て之を會通すべく、言説の罄す能はざる所、文字の施設し能はざる所の者也。

宇宙の大靈命あり。是れ宇宙の大自然に由て之を知る可し。即ち是れ絶大無極、神妙莫測、宇宙靈命

の本體、普遍にして通融せざる所なく、高遠にして透達せざる所なく、萬能にして化育せざる所なく、無限にして包容せざる所なき者也。其徳は無限、其愛は無量、其威は至て雄大、強として摧けざる無く、堅として破れざる無し。其尊は最も高崇にして物として、莅まざる無く、類として畏れざる無し。此れ宇宙の大靈たり。大能たり。生命たり。而して徳の本體、絶對眞、圓滿善の根源也。

夫れ形骸は靈命の府にして、宇宙は大靈命の大

形骸也。日月星辰の蒼空に麗乎たる、山河草木、人類禽獸、金石土芥の地上に燦然たる、蒼々膊々、濟々混々。以て之を名くる無し。強て之を名けて萬有と爲す。萬有の體は大也。萬有の形は美也。萬有の數は無量也。萬有の作用は究章す可からず。此れ宇宙形骸の大觀を爲す所以也。而して此の萬有大觀あつて以て宇宙を概念すべし。故に萬有は宇宙の藉て以て營造する者也。萬有の間に統一あり焉。區類あり焉。調攝あり焉。明々闇々、窮極變化、此れ正に宇宙靈

命の其大意思を發揚闡明する所以の者也。

宇宙一切の萬有は盡く絶對唯一の大靈命より洋溢發出す。大靈命は一切萬有の大極大因也。分て分つ可からず、割て割く可からず。固より純然渾然として一元なる者也。大靈命あつて而して後に萬有是に由て生ず。故に大靈命は萬有の母也。即ち萬有の母なりと雖も萬有を發出したるが爲めに其力は毫髮も虧損する所ある莫し。若し夫れ大靈命無くんば一切萬有は一日も在在すること能はず。

然かも大靈命は萬有なしと雖も永劫無窮に超在す。譬へば太陽の光明赫耀として普く天地萬物を照し、而して天地萬物即ち其徳に因て生資播殖すと雖も、之が爲めに太陽は失ふ所あるに非ざるが如し。蓋し大靈命が一切萬有を生ずる所以のものは、至善至仁、至公至正にして、其無量無邊の徳を有するが故に外ならざるなり。

宇宙大靈命に大意思あり。大靈命の大意思は即ち宇宙大律法にして、萬有は盡く此の大律法に規

準せられざる者ある無く、亦た此の大則に統治せられざる者無し。而して此の大法に最上の徳あり、最上の知あり、最上の眞理あり、最上の善美あり、最上の威權あり、最上の正義あり、此の大法は宇宙大靈命と共に相終始し、永却無窮、自彊不息の大時劫と並び行き、曠遠無極、不可思議の大虚空の間に、絶對の大威權、大慈悲、大功德を萬有の上に加ふ。

人の靈命には固より意思あり。意思の發動する處以て惡となり、以て善となり、以て邪となり、以て

正となる。正邪善惡の決定に依て發皇進轉あり、論落退轉ある也。

正邪善惡固より其の本體に於て區別あるに非ず。善惡正邪の由て生ずる所は其矩を渝ゆると、渝へざるとの境にあり。節に中ると中らざるとの間にある。人の行爲は、其意思の發動せる形也。意思の發動する所、其矩を渝へざれば、則ち善也、正也。意思の發動する所、其節に中らざれば、則ち不善也、不正也。矩と節とは道の中正なるものにして宇宙眞理

善美の存する所也。大靈命の意思は恒に斯にあり。所謂一切の善義なる者は宇宙大法を遵奉するの謂也。所謂一切の罪惡なる者は、宇宙大律に違悖するの謂也。人は無明なるの故に大靈命の大意を覺悟すること能はず。此に罪業を生ず。人は無知なるの故に宇宙の眞理を達觀すること能はず。此に惡業を生ず。克く大靈命の意思を洞見し、克く大律法の眞理を悟解すれば、一切の罪惡を脱離して、一切の善美を享受すべし。

何の故に全能の權力を有せる大靈命は、却て人をして大法に背離し、冥行以て罪業を犯すの力を與へたるかを疑ふこと母れ。何の故に無量の功德を有せる大靈命は、却て人をして大律に違悖し、妄作以て惡事を爲すの意思を賦したるかを怪しむこと母れ。之を省察し之を思索すれば、此に大靈命が無限最勝の慈愛を人類に與へたる所以を知らん。

夫れ大靈命は絶對無限なる者也。絶對無限なる

の故に完全無缺也。完全無缺なるの故に全能圓滿也。唯だ大靈命のみ獨り全能圓滿なることを得べし。大靈命は一にして二あらず。二ある者は大靈命に非ざる也。一切萬有は皆な大靈命より發出せる者也。萬有は固より大靈命に非ず。大靈命に非ざるの故に相對有限也。相對有限なるの故に完々全々なる能はず。完々全々ならざるが故に此に進轉開發の餘地有る也。

人固より全能に非ず。有限にして不完全なるの

故に此に改善の要あり。改善の要あるの故に諸善を修め衆惡を去らざる可からず。諸徳を奉行し衆罪を調伏するは固より精進努力を要す。精進努力ある處には必らず賞罰あり。賞罰ある處には必らず苦樂あり。賞罰苦樂は人類靈命の進轉開發に缺く可からざる也。

曲あれば斯に直あり。偽あれば斯に眞あり。惡あれば斯に善あり。邪あれば斯に正あり。若し人に於て惡なく、邪なく、曲なく、偽なくんば、則ち亦た何ん

ぞ此の善、正、直、眞あらんや。曲、直、眞、偽、善、惡、正、邪の分別なくんば、斯に賞罰あることなし。賞罰なるものは善を善とし、惡を惡とし、正を正とし、曲を曲とし、眞を眞とし、曲を曲とするにあれば也。既に賞罰なければ、苦も無く亦た樂もなし。罰あるが故に苦あり、苦あるが故に樂あれば也。苦樂は賞罰を彰明する所以也。

苦樂に大小あり。苦樂に長短あり。苦樂に強弱あり。苦樂に淺深あり。苦樂の現相は千態萬狀一々舉

て數ふ可からず。要するに之れ人類靈命は苦を厭
惡して樂を愛惜せざるはなし。嘗だ旦夕の苦を忍
んで、而して恒久の樂を得んとするものは之れ有
り。須臾の樂に耽つて、而して永遠の苦を求むる者
は之れ有り。之れ聖賢昏塞の岐るゝ處也。

斯に樂あれば斯に苦無かる可からず。苦樂あれ
ば賞罰の起る必然也。賞罰は善惡、邪正、眞僞、曲
判つの義なれば也。既に人の行に善惡、邪正、眞僞、曲
直の分別あるは、之を爲す所の靈命の意思自在な

れば也。事に善惡の異同なし、行に正邪の差別を生
ずる也。無量數の善惡正邪の分別する處は、唯だ其
の規を踰ゆると踰へざるとの分秒毫髮の間に在
り。自在意思の妙用、最勝の運行は繋て此の刹那に
あり。乃ち大靈命の意思、宇宙大法の精神は、斯に於
て觀る可し。神人獨り克く此の機微に参加するを
得る也。

故に大靈命を觀じ、其大意思を覺り、其大律の繇
つて立つ所以を融解し、而して其大德、大權、大慈、大

愛を懽悦信遵する者は、則ち永遠の光榮仁壽以て致すべし、悠久の康樂安喜以て獲べし。大靈命を觀ぜず、其大意思を悟らず、而して其大法の力を疑偽する者は、則ち畢生の災晦窮劫、離脫すること無く、永世の悲痛苦悶を除去するに由し無し。

人果して何に因りて其畢生の災晦窮劫と、永世悲痛苦悶とを離脫すべき乎。人果して何に因りて永遠の光榮仁壽と、悠久の康樂安喜とを獲得すべき乎。

人又何に因りて大宇宙大律を會得し、大靈命の大意思を觀取するを得べき乎。此れ他なし靈命の發皇にあり、靈命の發皇は惟一而已。德是也。德に達するの途二あり。曰く眞知、曰く靈觀、是也。

眞知は之を努力精進に得る者也。靈觀は之を信仰祈願に求むる者也。眞知を得て而して靈命無極の發皇始まる。靈觀を得て而して靈命無量の妙啓生ず。靈命の發皇、此の聖境神域に達せば、一切萬有を超越して、宇宙大靈命の大威權、大慈愛、大功德の

光明精華に入るを得べし。

人皆な靈命あり。然も人皆な發皇せる靈命を有するに非ず。眞知、靈觀を得て而して後ち靈命の發皇あり。之を以て宇宙靈德を觀じ、而して宇宙の大靈命、以て見る可し。之を以て宇宙の大意思に参加し、而して宇宙の大意思以て見る可し。之を以て宇宙大法を融會し、而して宇宙大法の作用豁然として明覺すべし。

人に聖賢昏塞の差別あり。是れ靈命の發皇を得

ると得ざるとに由て定まる也。聖也、哲也は其努力精進の業と、信仰祈願の功に由て、而して靈命の發皇妙啓を得たる者也。之を以て宇宙大靈を觀し、而して其大意思と大律法を會得したる者也。昏也、塞也は則ち然らず。故に聖人、哲者は其德に因て而して權威有焉。德光有焉。尊榮有焉。

人類最上の知識は大靈命を觀し、而して其大意思を悟り、其大律法を會通するに在り。人類最高の德は、大靈命を信仰し、其大意思に遵從し、其大律法

を奉行するにあり。

蓋し是に於て人類最高の光榮有焉。最大の幸福有焉。最上の慰安有焉。最極の圓滿有焉。人生無量數の禍災窮窘及び一切苦厄亦た之に由て之を離脱するを得べし。夫の禍災窮窘及び一切の苦厄なる者は、皆な靈命の暗愚蒙昧にして、智識なく、信仰なく、聽けども大靈命の徳を會せず、説けども其意思を悟らず、見れども宇宙大法の真相を覺らざるに由りて生ず。

不息の努力精進を以て知徳を成就せよ。無礙の信仰祈願を以て靈徳を觀取せよ。而して一切の苦悶より脱離して宇宙天地の大光明に入る可し。

古より徳聖智哲皆な、最勝の努力と無上の信仰を以て、靈命の門に入らんことを努めざるものなし。其教義に於て淺深高卑の殊ありと雖も、而かも其宇宙大靈命の眞理を索めんとする本願に至つては則ち一也。

吾れ古の教義と信條を棄てしめんが爲めに是

の説を爲すに非ず。更に高大なる光明仁壽を斯民に與へんが爲め也。恒久の悲痛煩悶より、億兆の衆生を解脱せしめんが爲め也。

因果第三

天地萬有、因有れば必らず果有り、果あれば必らず因あり。未だ因無くして而して果有る者有らず。亦た未だ果有つて而して因無き者無し。有は無より生ずる能はざるの故に、無は有を生ずるを得ず。是を以て一者則ち絶對也、太極也、而して萬有の大因ならざる可からず。宇宙因果の大法は太極一元の眞理より來る者也。

宇宙大靈命は則ち萬有の一元也、太極也、大因也、大素也、一切萬有は盡く因を大靈命に發する者也。大靈命は本より太極にして無因なる者、惟た大因なるの故に萬有是れより生ず焉。萬有若し大因、太極、大素なくんば因果の大律は實在する能はず。因果の大律實在せば斯に大因、太極必らず存せざる可からず。故に因果の大律は大靈命の實在より發し、而して其作用は之を人生に通じ、而して之を一貫し、之を萬有諸類に概して、而して之を一致し、千

萬億兆其物を殊にして、而して其理を一にする者也。

此の宇宙根本の眞理より善惡因果の大律は無量數、人生行爲を律して正邪應報の理を闡明す。善因あれば斯に善果あり。正因あれば斯に正果あり。惡因あれば斯に惡果を生じ、邪因あれば斯に邪果を生ず。未だ善因あつて、而して惡果を生ずるもの有らず。又た未だ邪果の正因より來る者有らず。是れ宇宙天地の眞理也。正邪善惡吉凶禍福、一切其業

因に應じて報果あり。一行一動一想一念の微と雖も皆な因と爲り、果となり、果と爲り、因と爲り、而して賞罰應報、之に隨ふもの有らざる無し。人生幾百千萬、無量數の行動想念、盡く原因結果の胎息たらざるものあらん歟。譬喩へば影の形に従つて現はるゝが如き也。

因果大律の作用には必らず應報賞罰有り矣。斯の律法を通じて大靈命の意思以て行はるゝを見るべし。夫れ賞罰何を以て存す。以て善を勧め惡を

懲すに足れば也。人生に善惡正邪あるの故に天地の間賞罰無き能はず。善惡正邪何を以て生ず。人類靈命の意思自在にして行爲隨意なれば也。

靈命の意思自在にして行爲隨意なるの故に、斯に修善避惡の努力を要す。努力は靈命の發皇を致す所以也。靈命の發皇は是に由て無上の愛樂歡喜を致すべければ也。

因果大律の作用は廓然太公なる者也。偏倚無く岐視無く、秋毫の微と雖も賞罰の輕重を錯度する

こと有る無く、亦た其應報の分別を誤認すること有る無し。此の大律の前には貴賤貧富の別なく、男女長幼の差なく、惟だ善惡正邪の區別ある而已矣。一切平等にして又た均一也。此の大律を力行遵奉する者は、其因に應じて而して光榮有焉、福祉有焉、歡悅有焉。此の大律に違悖する者は其因に對して而して民滅有焉、殃禍有焉、悲痛有焉。斯に宇宙大靈命の無限權威と無量仁愛は、此の大律を通して人類萬有の上に現示せるを見るべし。上は則ち萬乘

の王侯より、下は則ち窮巷の賤民に至るまで、大は則ち民族國家より、小は則ち一身一家に至るまで其消長興敗、一として因果賞罰の大律に繩準せられざるもの無し。

宇宙天地の間、蒼蒼焉。茫茫焉。善惡應報、禍福繼承の運行は、蓋し目を以て見る可からず、耳を以て聞くべからずと雖も、其大律の作用は日月の天に耀き、雨露の物を滋し、照さざる所なく、臻らざる所なきが如し。本より其時の何の時たるを問はず、其地

の何の地たるを問はず、其人の何の人たるを問はず、其事の何の事たるを問はざる也。

人の見る無きの故を以て敢て汗惡を犯す母れ。屋漏の間、神明伺ふ焉。袞影の地、陰隲版る焉。蓋し所として大律の存する無きは無き也。其獨りを慎むは、此の大律の恐る可きを恐るにあれば也。又た人の見る有るの故を以て善を爲すこと母れ。偽善は大律の明察を欺き、其の尊嚴を瀆す者なれば也。

如是因果大律の作用は、公明嚴正にして而して

間然する所のもの無し。然れども善惡正邪に無量數の差別有焉。善惡正邪に無量數の差別あれば則ち善因惡因、正因邪因、亦た之に随つて差別を生ず。而して累々たる結果亦た無量數の差別を生ぜざるを得ず。故に因果大律の運行、應報賞罰の作用は、千萬億兆、無量數にして文字言説の能く施設する處に非ざる也。

然り、善惡の應報に千萬億兆無量數の差別有りと雖も、之を究して之を竟すれば、則ち一切苦及び

一切樂の形式に於て發現せざる者非ざるなし。其因を爲すものは吾か靈命にして、其果を受くる者は亦た吾が靈命也。故に吾が靈命の善惡正邪に對する無量數の作爲は、乃ち無量數の吉凶禍福を齎らし而して之を吾が靈命の上に加ふる者也。

人の長壽なる者有り。亦た夭折する者有り。病羸なる者有り。亦た健強なる者有り。不幸なる者有り。亦た嘉福なる者有り。卑賤なる者有り。亦た高貴なる者有り。富裕なる者有り。亦た貧困なる者有り。優

美なる者有り。亦た醜陋なる者有り。人の愛敬を贏する者有り。亦た人の憎嫌を受くる者有り。人の欽仰を博する者有り。亦た人の蔑藐を招く者有り。是れ皆な其靈命の作爲する所に由て而して各異なる者也。即ち其善惡正邪の所行に隨つて而して之を得る而已矣。

然れども善惡正邪の因果應報の作用に於けるや、綜錯複雑を極む。其應報の開呈は吾か現代に於て之を享受する者有り。吾が子孫後裔に及んで之

を享受する者有り。未來の靈界を俟つて之を享受する者有り。諸三界を踰つて而して來る者亦た之れ有り。蓋し一一之を擧げて而して一一之を説く可きに非ざる也。

玉石に刻まれたる謨訓は、時有つて磨滅するこ
とある可し。金鐵に鑄られたる規矩は、時有つて朽
腐することある可し。獨り因果の大律は則ち宇宙
大靈命の意思にして、永遠無窮に萬有を體統制裁
し、其無限の權威と慈愛を萬有の上に加ふ。

兩極 第四

萬有皆な兩極有り。一は之を名けて積極と云ひ、
一は之を名けて消極と云ふ。或は陽と云ひ陰と云
ふ。名殊ると雖も其義は則ち一也。

兩極陰陽は宇宙萬有進轉開發の大法にして、因
果の大律と其本俱的大理を一にす。

譬へば繩の絢へるか如し。因果應報の大律と兩
極陰陽の大法は表裏を爲し相俟て離る可からず。

因果の中に兩極あり、兩極の中に因果あり。是の如くして宇宙萬有を體統し、大靈命の精神意思を闡明す。而して此の大法の力は以て大時劫の間、大虚空の中、悠遠無窮に萬有を進展開發せしむ。

萬有に兩極陰陽を有するの理は、物力發動に要する必然の状態也。夫れ物の動かんとするに當てや、必らず一揚一抑、一暢一屈、一高一低、常に波動の形狀を爲す。是れ物力發動の形式也。其の揚たり暢たり高たる者は積極の勢也。其の抑たり屈たり低

たる者は消極の勢也。凡そ物力の發現する處には必らず兩極の作用起らざるなし。而して物力發動に必らず波動の形式を要する所以は、此の形式の最も發動に便利なるか故也。一切萬有、靈命に兩極陰陽の生ずる所以も亦た此理に外ならず。

萬有の現象は、靈力の發動にして、靈命が其意思を化現せる形也。萬有諸靈命は、其原初に於て咸な大靈命より分出進展したる者也。萬靈發せず、收歛凝一なる時に當て、固より沖漠にして兩極陰陽の

別ある無し。其の靈力の將に萌動せんとして未だ萌動せざるの時、判然として現して二となる。一は則ち積極の力たり、一は則ち消極の力たり。積極の力は陽靈命たり、消極の力は陰靈命たり。積極と曰ひ消極と曰ふ、皆な是れ靈命の一體にして而して二體なるに非ず。然かも實は同に似て而して同なるに非ず、異の如くにして而して異なるに非ざるなり。故に靈命兩極の間に於て、等差なく、輕重なく、貴賤なく、上下なし。各其の分に依て、各其生を生と

し、各其化を化とす。之を合すれば則ち一體となり、之を分ては則ち宇宙萬有の父母となる。

宇宙萬有を通して必らず兩極陰陽を備ふるを觀る。即ち斯に其の微妙幽玄の眞理、宇宙大法の至善の作用を觀るへし。

苟も靈命の在る所、必らず兩極陰陽無きはあらず。即ち宇宙の間靈命無きの萬物なく、又兩極陰陽無きの萬物無し。人類に於ては男女の別となり、禽獸蟲魚草木に於ては雌雄の別となる。金石土芥、風

霜雨露、有形無形、一切萬類に至る、亦た固より兩極陰陽の別無きに非ず。唯た人類、禽獸、昆蟲、魚介、草木の如く雌雄の別、明かならざる而已。

如是一切の靈命は、兩極陰陽を兼て之を有せざる無し。是れに由て宇宙萬有は無量數の進化増長を發生す。是に由て宇宙萬有は無盡期の變轉開發を成就す。之れ靈命の兩極大法の幽玄絶妙なる所以也。

靈命の兩極陰陽の大法とは何ぞや。之を要言す

れば異極互に求引し、同極互に拒反すること是也。宇宙萬有を一貫せる眞理此に在り。而して萬有の聚散離合、開閉否泰、一として此の大法の妙用に由らずして生ぜざる者なし矣。

靈命の兩極陰陽たるや、固と一體にして而して二體、二體にして而して一體なる者也。兩極陰陽、分るれば則ち相合し、合すれば則ち相分る。蓋し二より一を成し、合より分に轉ずるの意思、萬有を通して而して之れ有らざるはなし。是故に兩極陰陽の

間には常に求引の力あり。求引の力は兩極陰陽の靈命、相合して一體となり、分合の調和を得んとするより生ず。

兩極靈命の調和を得んと欲するの力微弱なれば、則ち求引の力も亦た之に隨て微弱也。兩極靈命の調和を得んと欲するの力、深且つ切なれば求引の力も亦た峻烈を加ふ。故に求引の力、脆弱なれば則ち兩極の調和は脆弱也。求引の力、強烈なれば則ち兩極の調和は強烈也。

兩極靈命の求引する處の力は、萬有の異同に隨つて大小強弱無量數の差別ありと雖も、天地一切の萬有は、即ち一として其至善至美なる兩極靈命の調和を求めんと欲せざる者なし。

日月星辰の運行、風雨雷霆の發作は、天に於ける兩極靈命の更に善美なる調和を得んと欲して而して之を顯現する者也。禽獸昆蟲草木の離合聚散は、皆な地上に於ける雌雄靈命の更に善美なる結合を求めんと欲して而して之を表示する者也。

兩極靈命の合して一を成さんと欲するや、斯に求引の作用を發生し、二極合一すれば活力斯に充溢す。陰陽雌雄の兩勢、調和合一すれば斯に新靈命を分殖す。

兩極靈命の調和を得たる處には、必らず新靈命の分殖あり。陰陽兩勢は、常に相求引して調和合せんと欲す。既に調和あれば必らず分殖あり。之れ萬有の進展開發を成就する本源也。

男女相愛の理は、兩極靈命の相互求引する作用

に外ならず。戀愛の情緒は、迺ち此の作用の峻烈なる者也。飛鳥走獸の間にも雌雄相愛の情あり。昆蟲草木と雖も雌雄相愛の情あり。金石土芥、塊然として賦形し、磁氣、電氣の幻然として氣を成すもの、其物類の原子と原子の間には、皆な陰陽求引の作用あらざる無し。即ち物類の自觀よりすれば、之れ物類の相愛にして、人間男女の戀愛と其本性に於て異なる處なし。

凡そ男女相愛の理は、皆な兩極靈命求引の眞理

より發す。斯れ即ち兩極靈命の調和合一を欲するの意思を明かにする者也。

故に相愛の情、最深厚なるは、求引の力、最絶大なる者也。求引の力、最絶大なるは兩極靈命の調和、最も鞏固なる者也。兩極靈命の調和、最も鞏固なるは男女の結合、最も親密なる者也。而して男女の結合、最も親密なれば斯に最も善美なる人類新靈命の分殖を生ず。乃ち最も善美の人類の子孫後裔は、最も善美なる男女相愛兩極調和、夫婦結合に求むる

に非ざれば不可也。

抑兩極靈命の大法は宇宙天地、人類萬物を通じて之を一貫せる真理也。此の真理の故に由て人類萬物は悠遠無窮に進轉開發する者也。此の真理の故に由て人類萬物は偏重偏輕の退轉敗類を離脱するを得べし。此の真理の故に由て人類萬物は平等圓滿の發達を成就すべし。宇宙萬象は夔乎として其れ限無き也。煥乎として其れ章有る也。是れ咸な靈命兩極變現の妙趣也。是に由て以て人類萬物

は愈よ得て而して分殖し、而して開發し、而して暢進する者也。譬へば畫工の丹青を調へて而して之を分合案配し、以て千態萬様、無數の彩色を施し、萬象の色を活現するが如し。此の眞理を悟れば、則ち至大幽幻なる大靈命の神想妙意、得て而して之を觀るべし。

男女相愛、夫妻好樂、陰陽調和の妙用は、兩極靈命の大法より發生流行せる眞理にして、迺ち大靈命の意旨なり。故に此の大法に於て之を危害し、之を

障礙し、之を破壊する一切の信條、言說、制度、風俗、慣習は皆な罪惡也。

男女兩性は孤棲獨居す可き者に非ず。孤棲獨居は、靈命分殖の大機を滅却し、全人類の進轉開發の前途を阻礙す。即是れ欺天罔人の所業なり。彼の全人類の進展開發の爲めに、更に大なる貢獻を爲さんと欲するに非ずして、動もすれば則ち男女孤獨の生涯を爲す者は是れ罪惡也。

宇宙に於ける陰陽兩性の地位は、平等にして而

して差別無き者也。陰也、陽也、雌也、雄也、男也、女也、各其分に循て以て自ら尊しと爲す。男子の婦女に於て之を迫害し、之を壓抑し、之を卑下し、之を蔑辱する者は、是れ兩極大法の權威を犯す者也。

宇宙大法に於て、男女固より貴賤輕重の差別あることなし。男女を以て之を別ち、尊卑上下を爲すは、是れ大法の眞理に悖戻する罪惡也。

現世第五

現世とは則ち現象世界の謂也。宇宙萬有の森森鬱鬱たるは、即ち萬有靈命の意思化現の形也。靈命意思は即ち其精神にして、萬有は皆な其意思を以て自己を化現し、自ら活動し自ら決定する力を有す。故に萬有の現象は靈命化現の形にして、是に由て活動し、是に由て決定せんが爲め也。

現象の世界は現世也。現世は萬有意思の發動せ

る世界也。故に現世は常に活潑、潑地、生動不休の情態にある有也。

萬有靈命は皆な自己を開發するが爲めに、永遠無窮に自彊不息の努力を爲す。萬有現象の生動無休、變化無常、窮極なき所以の理斯に在り。兩極の大法と因果の大律は、萬有開發の惟一の衝動にして、而して又萬有進轉を決定する惟一の作用たる也。人は何の故に現世に來りたるか。現世に於て人は何を爲す可きか。蓋し現世の由て起る所以、萬有

現象の由て發する所以を知れば、則ち能く人生の眞意義を悟るを得べし。人生の眞意義を知れば、則ち宇宙大靈命の眞理亦能く之を悟るべし矣。

人生の眞實相を觀取せざるの故に、人類は諸惡衆罪の裡に顛倒迷妄して而して悲痛、苦悶、流轉、泯滅の外に離脫すること能はず。此の眞實相を解得して而して努力奉行せば、則ち無上の光榮仁壽以て致す可く、無量の康樂、懽喜以て臻る可し矣。

人生界は人類靈命の化現せる世界にして、靈命意思の生動活躍せる現象也。人は現世に於て自己を改善し、靈命の發皇を成就せざる可からず。是れ即ち靈命化現の最高目的なれば也。即ち人類靈命を改善し其發展を成就するは、現世に於ける人の爲すべき最高の目的にして、人に現世ある所以も亦之に外ならず。

現世は萬有精神の充周流行する世界也。現世は萬有意思の生動活躍する世界也。萬有諸物は現世

界に於て自己を保全し、自己を開發し、自己を進轉し、自己を擴大せんが爲に努力せざる者なし。而して萬有諸物は各自己の努力を以て他を攝取するか、然らざれば他の爲めに攝取せらる可きものとす。

此間に處して人は如何にして其自己の保全、開發、進轉、擴大を成就すべきか。道は唯一ある而已。曰く眞理に準據して善闘努力する是也。

人の現世に生るゝは無爲安逸の爲めに非ずし

て即ち善闘努力の爲め也。現世界は無休不息の戦場也。而して人生は善と悪との戦也。正と邪との戦也。罪と功との戦也。淨と不淨との戦也。知識と妖魔との戦也。眞實と虚偽との戦也。良心と誘惑との戦也。光明と闇黒との戦也。即ち兩者の間に峻烈なる戦闘は間斷なく行はれ、而して人は常に此の戦場に於ける主人也。

人生界に於ける人類最大の努力は眞理に倚つて無休の意思、不息の精神を提て一切の罪業と戦

ひ、悪魔と戦ひ、不淨と戦ひ、誘惑と戦ひ、闇闇と戦ひ、而して之を調伏するにあり。人の斯世に生る蓋し斯戦を戦はんと欲するに由て來るもの、人にして斯戦を爲すを欲せざれば則ち人たる所以の本義を滅却するもの也。故に人世に於ける人の最大義務は諸悪衆罪を克服するにあり。

人は獨り自ら其の義務を遂行し、而して人生の能事終れりと謂を得べき乎。未也。善人は相援け戮力一致、世界の罪惡を征服殲滅せざる可からず。戦

つて而して勝つ者は之を前驅とし、戦つて而して敗るゝ者は之を後援し、戦つて而して亡する者は之を周恤し、戦つて而して痛む者は之を救護し、戦つて而して戦を知らざる者は挺身以て之を督率し、戦つて而して危きに臨む者は協力以て之を賛翼し、戦つて而して戦ふ無き者は以て之を餉犒し、相守助し、相扶持し、相親しみ、相愛し、出征して而して凱旋する者、人類最高の努力斯に存し、人類最高の道徳亦た斯に在り矣。

光明の後に黒闇あり。善福の背に罪殃あり。悪魔は宇宙に瀰漫し、誘惑は萬有の間に伏在す。蓋し吾が意思の發動する處其間必らず罪惡の呪咀あるは形影相隨ふが如くにして而して須臾も離るゝこと能はざる者也。

此の故に一想一念の微と雖も之を等閑に付す可きに非ず。一舉一動の末と雖も之を輕視すべきに非ざる也。若し心理に一刹那の懈怠、一毫髮の偷安あれば則ち諸惡衆罪は群起して儼か敵となり

働が心身を此の犠牲に供せずんば已まず。是れ人の現世に處して眞理の爲めに、無休不息の善闘努力無かる可からざる所以也。

眞理の生活は、現世に處する最勝の理法にして靈命發皇を成就する唯一の道也。

眞理を會得し、眞理を把持して、人生の活動に參加するものは徳行也。故に徳行は眞理の生活也。

人生生活の現象は滋繁にして擧て數ふべからず。然れども之を綜合し、之を分類すれば、盡く十大

生活に歸納することを得べし。

曰く、意識生活、曰く肉體生活、曰く家庭生活、曰く社會生活、曰く經濟生活、曰く政治生活、曰く宇宙生活、曰く自然生活、曰く藝術生活、曰く精神生活、是なり。

人生活動の局面は、畢竟するに此の十大生活の現象の外に出でず。眞理は全生活を通して周充流行し、事として接せざるはなく、處として存せざるはなし。眞理に準據する生活は徳行にして、眞理を

冒瀆する生活は不徳なり。

眞理は純一にして不變なり。然れども眞理に準據する生活は、生活の局面を應じて其作用を同ふせず。之れ徳行に範疇ある所以也。

意識生活は人生の第一義にして、意識あつて初めて人生あり、人生あつて初めて徳行ある也。意識生活は知情意より成る。知的生活にあつては靈智を以て徳となす。情的生活にあつては自制を以て徳となす。意的生活にあつては勇毅を以て徳となす。

す。

靈智は知能の理想化にして生活の基本也。之によつて自己を覺り、之によつて外界と調和し、之によつて是非得失を知り、之によつて正邪禍福を明かにす。靈智の徳を離れて人生一日も存する能ず。節制は欲情を節度制御するの徳也。人生に欲情あり、飲食、居住、聲色、財譽に對し、欲情の發動するところ千態萬様、際限あるなし。欲情の充足には常に強烈なる快樂の誘惑あり。節制の力なく之を恣に

すれば諸悪衆罪は群起して遂に人生を破壊せざんば止まず。

勇毅は事に臨んで敢然として決行するの徳なり。善を見て徳を行はんとするや、必らず苦痛危惧、恐怖の念あり。此時に當り、一切の障礙、壓迫、誘惑を排し、之を克服するは不撓の勇毅を要す。之を失ふは怯懦、屈辱、萎縮、困憊の不徳に陥るもの也。

肉體生活は健強を以て徳となす。靈肉元より一、肉體は靈命の表現なり。靈命あつて肉體は營造さ

れ、肉體を通して靈命の活動を見るべし。故に靈を尊んで神聖となし、肉體を軽んじて罪惡となし、肉體を苦むるを以て靈に對する奉仕、解脱の道となすが如きは、人生を墮落せしむるもの也。靈肉は相應相感分離すべからざる關係を有す。故に清淨、營養、運動、休息以て肉體を健強ならしむるは靈命を偉大ならしむる所以也。

家庭生活は和親を以て徳となす。家庭は和合親愛せる男女兩性の夫婦結合によつて成立す。男女、

性同じからず、各々天分を以て尊しとなす。其間固より尊卑優劣の差ある可からず。夫婦あつて、茲に親子あり、茲に同胞あり、茲に親族あり、茲に種族あり。其感化は遠く全人類に及ぶ。故に家庭は生長安息の聖地、智育德育の學園、文明の搖籃、而してまた最後の城廓也。

社會生活は同情を以て徳となす。社會は協力也。人は社會を離れて獨存する能はず、常に社會と利害を同うす。人を愛する己を愛するが如くす。人の

喜びを喜びとし、人の悲しみを悲しみ、歡樂の情を同うし、愁苦の情を同うす、之れ社會共存の要義也。經濟生活は生存の需要を充足するものにして、其過程を分つて三となす。曰く生産、曰く交易、曰く消費、是なり。

生産にあつては勤勞を以て徳となす。天下一物と雖も勤勞なくして得る能はず。勤勞は經濟生活の第一義ならざる可からず。故に勤勞なき生活は不義也、不徳也。

交易にあつては正直を以て徳となす。勤勞は生産の能率を助長し以て富を増致す。是に於て貨物の交易起る、交易は商賣也。貨物は勤勞を表示するものにして、其の交易は正當直義ならざるべからず。故に商賣は正直を以て原理となす。不正直の交易は詐偽、掠奪、不義、交徳也。

消費にあつては節約を以て徳となす。生産、交易の目的は消費にあり、随つて得れば随つて消費し、剰すところ無くれば富もなく財もなく貯蓄なし

也。富財なくんば經濟の進歩期すべからず、何の處にか富強文明あらんや。是に於て入るを計つて出るを制し、勤めて用度を節し、克己抑制欲、情の満足を求めず、一時の快樂を貪らず、無用の消費を省き、零細の散佚を慎み、之を蓄藏して以て將來の計をなす、之を節約の徳と云ふ也。

奢侈は濫用亂費なり。吝嗇は貪婪刻薄なり。共に惡徳にして經濟生活を破壊するもの也。

政治生活は忠誠を以て徳となす。人は孤獨して

生活する能はず。必らず群居す。群居すれば茲に權力あり、權力あれば茲に統御あり、統御あれば茲に政治ある也。家族に家長あり、種族に族長あり、國家に元首あり。國家は政治生活の發展也。

國家は靈命の發現にして、意思の主體也。國家の意思は主權にして最高の意思、權力權益を統一す。國家は最高の道德的存在にして、民人の福祉は之に依て増進せらる。

國家の存する處、必らず政治生活あり。政治生活

は忠誠を以て基根となす。忠誠は國家に對する奉仕也、犠牲也。忠誠の德彌よ大なれば國家彌よ盛也。正に其德に比例するもの也。

宇宙生活は、時間空間に處する人間生活を云ふ也。一切の念想行動は、盡く時間の中に生滅す。一切の身體諸物は盡く空間の中に存在す。人間の生活一事一物と雖も、時間空間の外に逸出するものにあらざる也。

即行は時間に處するの德也。人生限りあり、時は

生命なり、忽焉として來り、忽焉として去る。瞬時も留らず、時、一たび去らば永劫また還らず。爲すべきの事は、即時に之を行ふべし。一時に一事を處し、時を移さず、時を期して錯らず、機敏快速、手に到るもの直ちに之を辨ずるは、時に對するの徳なり、優柔不斷、怠慢安逸、蹶躅逡巡は、時の賊也。時の不徳也。

秩序は空間に處するの徳也。物皆な其の處あり。一處に二物を納る能はず。二物は一處に置く能はず。適當の處に適當の物を配し、各々其處を得るを

秩序と云ふ。秩序の具現する處、必らず規律あり。系統を明かにし分類を正うし、整然として誤るところなきものは、事物を處理するの徳也。散漫、放縱、紛糾、亂雜は此の徳を破壊するもの也。宇宙生活の觀念は、無形の觀念によりて構成せらるゝが爲めに、稍もすれば其の道德的意義を閑却するの恐れあり。警戒を要する所以也。

自然生活は、慈愛を以て徳となす。自然界の現象を見るに、禽獸、蟲魚、草木、鬱然として生息す。人は此

間に活き、靈智靈能を以て、克く萬物を驅役制御し之を犠牲として生存を營造す。欲して得ざる無く、爲して成らざるなし。是れ優劣の勢、強弱の然らしむる處なり。

然れども優者の優者たる所以は、強力の故に非ずして、其の徳の故にある也。優者の徳は慈悲愛憐の心にある。優者に此の徳あつて、茲に弱者の奉仕あり、貢獻ある也。慈悲愛憐の心なくんば以て優者たるに足らず。之れ唯だ殘虐狂暴のみ。

藝術生活は審美を以て徳となす。眞善美は元より渾然として一をなす。圓滿調和完全、一致を表徴するものは理想の美にあり。

美を創造するものは藝術の使命也。人生に藝術あり、以て生活を美化す。文明の藝術に負ふところ甚だ大なるものあり。

藝術をして偉大ならしむるものは審美の徳也。審美の力は、醜美判別し、克く人生をして不正、不義、虚偽、貪婪、慘忍、刻薄、一切の醜惡なる想行より遠離

せしめ、崇高、圓滿、典麗なる眞善美の世界に推進せしむるの功德あり。

精神生活は靈觀を以て徳となす。諸徳を修得し衆善を奉行し、深く眞理の生活に悟入するに随つて、顧みて人生生活の甚だ淺薄にして空乏なるを痛感し、功利と愉樂を度外し、肉慾物慾に超越して、更に偉大、崇高、悠久、無限の世界に入らんとする熱烈なる發願をなすに至る。恰かも黎明の曙光、漸く地平線上に出現して、明朗なる世界の開展し來る

が如し。之れ實に精神生活の世界也

精神生活の大覺醒は靈觀也。靈觀の徳によつて靈的人格を獲べし。靈的人格は、偉大なる靈的自己の開發にして、茲に人生は無限の啓示を得て、絶對無限永劫不滅の實在、大宇宙の本體、大靈命の眞姿を觀ずべし。之れ則ち神人感應の境地也。

人生に於て最も能く善闘努力を爲す者は其最も能く靈命の進轉發皇を致す者也。人の靈命は猶ほ未だ琢かざる璞玉の如き也。之を琢かざれば則

ち石たり、瓦礫たり、之を琢けば其玉の光輝得て而して闡發すべし。愈よ之を琢けば則ち斯に愈よ之を闡發すべし。努力精進の功愈よ大なれば則ち靈命の發皇進轉も亦た之に因て愈よ高大を致すべき也。

人生の諸徳衆善を擧て之を奉行し、而して人生の諸惡衆罪を擧げて之を滅盡する者、靈命の圓滿なる發皇是に於てか在り矣。

故に現世は努力の世界にして、決して安逸放樂

の世界に非ず。自疆不息の善闘を以て靈命の進轉を企圖せざる可からず。然れども人生の努力善闘を以て、誤つて恒久の苦痛、無限の喚叫なりと認むること勿れ。善闘努力は固より安逸放樂に非ずと雖も、努力善闘に由て而して得たる靈命には無限の歡樂あり、無窮の喜悅あり、無上の満足あり、無涯の光明ある也。

見よ。一切の苦難を征服したる時、一切の勞役を成就したる時、一切の窮辱を耐忍したる時、一切の

愛憎兇妄の念魔を調服したる時、一切の口腹聲色の誘惑を制御したる時、罪を宥し怨を忘れ、寛大裕恕の心を以てしたる時、人を慈み物を愛し、仁を施し義を爲し、至美至善の情を以てしたる時、誠奉信行、靈を觀じ徳を頌し、眞理の大光明に接したる時、何物か能く更に大なる満足と安心と歡樂と喜悅とを吾が靈命の上に加ふるものあらんや。誰か人生の善闘努力を以て苦痛叫喚なりと云ふや。

安逸放樂は眞の歡樂に非ざる也。虚偽の歡樂也。

夢幻の如き快樂也。夫の耳目を縦にし、口腹を飽し、淫樂に沈溺し、妖歡に惑醉する者を觀ずや。人生の行樂此に在りと思ふ者、能く幾時か其歡を享くべきや。眼前の歡樂、未だ央ならずして想外の悲愁哀傷、踵を旋さずして臻らん矣。蓋し悲愁哀傷の妖魔は、歡樂の幻影に追隨して而して陰顯常なき者也。人又た何を樂んで而して恒久の満足喜悅を索めざるや。

彼の精進努力を以て苦痛なりと爲すは、如幻如

夢の偽りの歡樂よりして眞歡樂に入らんとする一刹那、過渡現象に過ぎざる而已。猶ほ醉客の醒覺して其將に健全なる常態に入らんとするの時、俄頃の昏濁苦悶を免る能はざるが如し。人生の努力に避易し、善闘に畏縮し、安逸に沈溺し、放浪に墜落し、妖魔の誘惑に降伏し去る者、終に無窮の悲哀と泯滅を脱すること能はざる也。

故に曰ふ、人生界は戰鬪の世界也。進めば無上の光明に入るべく、退けば無上の黒闇に陥つべし、進

めば無量の愉樂を享く可く、退けば無量の悲痛を感ずべし。進めば無限の喜悅を保つべく、退けば無限の懊惱を受くべし。進めば圓滿具足の黄金世界あり、退けば啊鼻叫喚の醜惡世界あり。現世は實に其岐路也。人は即ち其上に徘徊す。

大靈命の大意思、宇宙大法は、則ち光明赫奕として人生を遍照し萬有を普統し、而して努力善闘を爲すものに發皇暢達を與ふ。迺ち知る。靈界に於て最も光榮あるものは其靈命なる哉。

生死第六

靈命は不滅、固より生死ある無し。靈命に生死なくして而して人に生死なるものあるは何ぞや。蓋し生死の實相は靈命の轉機を云ふ而已。

生は死の轉機、死は復た生の轉機、生ある故に死あり、死あるの故に生あり、生死固と其義を一にする也。靈命に此の轉機ありて而して生死の變遷を爲すものは、是に因て幽玄微妙なる大靈命の意志

を闡明し、宇宙大法の眞理を嚴證せんが爲めのみ。生は兩極靈命の合一調和より來れる分殖にして、是に由て靈命は常に改善せられ、常に新活力を得て現世の活動に参加す。如是にして生は無窮に現世靈命の進轉開發を促成す。

死は現世活動を成就したる靈命の代謝也。生あつて死無ければ萬有進轉の機なく、死あつて生なければ萬有絶滅して現世は空無に歸せん。

現象世界に於ける靈命の活動は、兩極靈命の和

合分出の作用に由て恒久に連続し無限に延長せる連鎖の如き者也。生死は其一連鎖に過ぎざる而已。生死の分界あるの故に由て靈命に三世あり。三世とは何ぞや。曰前世、曰く現世、曰く後世、是也。

現世は我也。吾が前世は吾が父母祖先也。吾が後世は吾が子孫後裔也。故に吾が父母祖先、子孫後裔は即ち吾が靈命の一流たり。我を生じたる者は父母、父母我に非ずと雖も我と別なるに非ず。何となれば吾が父母に於て見る處の一切は、之を我に於

て見る可ければ也

吾が子孫を生じたる者は我也。我れは吾が子孫に非ずと雖も我と別なるに非ず。何となれば吾に於て見る處の一切は、之を吾が子孫に於て見ざる處無ければ也。

吾が靈命の之を現世に得たるもの、固より之を吾が前世の父母祖先の靈命に求む可し。亦た之を吾が後世の子孫後裔の靈命に見るを得べき也。吾が兄妹弟姉は我と同一靈命の流派に屬する

もの、吾が親族骨肉も亦た我と血脉相通ずる者、譬へば猶ほ樹木の幹根枝葉の相離る可からざるが如し。故に吾が靈命の後世には一民族の運命あり、一國家の運命あり、一人種の運命あり。

靈命の原初に於ては惟だ意思あり。意思の發動するや無量の念想動作を生ず。無量の念想動作は復た無量の正邪善惡の所業を爲す。無量の正邪善惡の所業は盡く靈命に染着して靈性を造作す焉。之を名づけて性格と云ひ或は人格と云ふ。靈性は

百千萬劫、靈命が善惡正邪の所業に因つて陶醸せる者也。譬へば泉源の水の如し。洗洗乎として幽谷より發するや、清澈無垢玉の如く、纖塵に染着せざる者、惟だ其流れ淨土を出で而して塵世に入る。斯に濁流生じ、溷渠成り、渣滓起る。是れ水の本性に非ざる也。善正を踐修する者は善正の靈性を陶成し、邪惡を冒犯する者は邪惡の靈性を醸成す。同じく是れ人にして善惡正邪の殊なる所以は偏へに此の理に基く。猶ほ淨地を流るゝ水は清淨に、汚土を

流るゝ水は穢汚なるが如し。然りと雖も濁溷の水を取り之を沈澱して濾過すれば、則ち清淨の水を得べく、清淨なれば幽谷の清泉と以て異なる無き也。人性も亦た是の如き耳。善業徳行を以て其性格を薰陶すれば、則ち藏垢納汚の人性亦た是に由て遷善潔淨するを得ん。是の如くならずんば人性の濁流、將に億萬劫を閲して而して汎濫窮極なからんとす。

兩極靈命、相合一し相交攝して以て新靈命を分

殖する時、其靈命の含藏する所の一切の靈性は、盡く之を新靈命に遞傳せざる無し。乃ち前世に於て爲す所の善惡功過は、前世の靈性を造作して而して之を後世に遞傳す。現世に於て爲す所の一切の善惡功過は、又更に現世の靈性を造作して而して之を後世に遞傳す。父母の性格は之を子に傳へ、子の性格は之を孫に傳ふ。前世、現世、後世は是に由て往く焉。是に循つて來る焉。是の如き觀を作すもの之を靈性遞傳の法則と謂ふ也。

靈性遞傳の法則作用は複雑にして極まり無く、言説の能く名狀すべきに非ず。然れども之れ即ち三界を通貫して、滅却す可からざる一大理法也。而して其作用は常に原因結果、賞罰應報の大法と相俟つて而して悖らず、益其幽玄を闡發し其正明を確證する者也。

斯の理に循つて而して之を尋繹すれば、則ち現世の吉凶禍福に由て、而して前世の因果を推窮することを得べく、又た現世の因業に低て後世の賞

罰應報を計度するを得べし。是れ即ち前世、現世、後世を統監して而して之を一貫せる眞理、光明赫耀として而して遍照せざる所なき者なり、此の故に諸惡の因を作つて而して靈命の退轉墮落の悲運を招くことある可からず。此の故に衆善を奉行して靈命の進轉發皇を力圖せざる可からざる也。人の現世に於て孳孳として努力善闘をなすは、一は吾が前世の罪因を消滅する所以、一は吾が後世を改善する所以也。

現世の我は遽然として此宇宙の間に生れたる者に非ず、洵とに前世幾千萬、無量数の努力因業を成就し來りたる我れ也。我れ現世に於て更らに幾千萬、無量数の因業を造作する者、我れ將に吾が後世無窮の運命を決定せんとする也。現世は則ち後世の我を解釋すべき唯一の鍵鑰也。

● 生より死に臻るの間、吾が現世靈命の力戰有爲の天地也。吾が靈命は既に父母祖先が過去千萬億、無量數無量劫の努力の効果を以て而して其發足

地となし、以て吾が現世活動の天地に入りたるもの也。故に我は其發足地に於て既に現世を開發すべき一切の能力を具有す。

現世生活に入れる吾が靈命は、其前世一切の能力を發現するが爲めに、必要なる肢體の構成、五官の完備に従事せざるを得ず。是れ所謂形骸の營造にして、蓋し現世靈命の啓發進轉を成すが爲めに闕く可からざる機關なりとす。

形骸營造の能力は靈命の意思也。此の意思ある

の故に靈命は分殖の當初より不休の精力を以て外界の物類を攝取して而して間斷なく自己形骸の營造に従事す。

靈命の意思能力、健強なれば則ち爲めに營造する所の形骸も亦之に随つて而して健強也。其意思能力、羸弱なれば則ち爲めに營造する所の形骸も亦之に随つて而して羸弱也。

形骸の健強羸弱、醜美明塞は、皆な靈命の意思能力の健強羸弱、醜美明塞に由て而して決定する者

也。

人生れて而して聰明睿智、人格秀拔、群を超へ衆を抜く者之れ有り。之れ其前世に於ける靈命の嘉善懿徳の報果なり。以て其努力善闘の偉鉅たるを知量し得べき也。

人生れて而して闇塞魯劣、人格陋醜なる者之れ有り。之れ其前世に於ける靈命の遊惰放逸の報果を爲して而して之を前世に胚胎して之を現世に發現せし者、須らく現世の努力善闘を力圖せざる

可らず。

人生れて而して康強健吉なる者之れ有り。之れ前世に於て靈命の力行勇爲にして而して其善功徳行の美果を收獲したる者、苟も現世の行爲に於て戒むる處を知らずんば、斯に災殃凶禍、轉瞬ならずして來らざる者無からん。

人生れて而して悪疾不具の患に罹る者之れ有り。之れ前世靈命が罪を犯し悪を爲して而して現世に於て其危む可く恐る可き冥罰を招きたる者

須く現世に於て布施徳、端身正行以て前世の罪業を消滅し、而して後世の福祉を求む可き也。

夫れ是の如く現世の靈命は既に前世一切の徳行の慶福を享有すべく、又前世一切の罪業の痛苦を償はざる可からざる也。吾が現世の諸善衆徳を奉行する者、吾が後世の爲めに賞罰報果を思ふ所以也。故に我れ現世に於て二重の責任を有す。前世に對しては其罪業を償却せざる可からず。後世に對しては罪因を杜絶せざる可からざる者是也。

故に生は前生の靈命を改善せんと欲するに因て而して來復する者也。是に因て宇宙律法的作用を闡明し、是に因て大靈命の意思を暢發す。

凡そ靈命の開發進轉は生の轉機に由て而して之を發す。靈命に生の轉機あるが故に、因果應報靈性遞傳の立法は之に伴隨す。

靈命の含藏する能力の量は自から分度あり。能力に分度あるが故に活動の時期に自から限度あらざるを得ず。活動に限度あるは人に一定の命數

壽算ある所以也。

然れども人の現世に生るゝの時、其命數壽算に自ら長短の差別あり。人の命數壽算に長短の差別あるは、人の靈命の能力に大小強弱の差別あるが故也。靈命の能力に大小強弱の差別を生ずる所以は、則ち其前世の因業に因て決定せらるゝが故也。豈に獨り前世の因業とのみ云はんや、吾が現世の作業は更に復た吾が命數壽算の長短を決定す。

人呱呱墜地の一刹那より、各其靈命の能力に應

じて先づ形骸の營造に従事す。即ち之を一生に通じて自彊不思の處作、盡く靈命能力の發動消亡ならざるは無し。既にして一定の限度に到達すれば能力は消亡疲憊して用ふる處なく、形骸の營造、修理の諸能事必らず闕くるに至つて而して施す所なし。靈命是に臻れば則ち惟だ其形骸を支持するに足らざるのみならず、却て其負擔の重きに堪ざるに至る。人の靈命が其形骸を離脱して而して其負擔を卸すは即ち此時にあり。即ち是れ死の現相

也。

靈命の形骸を離脱するに當て、其攝取營造したる形骸の諸分質は直ちに解體游離し、各其單純なる本質原形に還歸す。

人は死を以て萬事を了すべきものに非ず。其分殖したる新靈命は子孫後裔として永く現世の活動に参加し、茲に其靈命の本體は現象世界を出て、宇宙靈界に入る也。

病苦第七

人の形骸を成すものは四肢五官、血肉筋骨也。而して人の形骸を營造するものは其靈命の意思也。靈命あつて而して後に形骸あり、形骸あつて而して後に靈命あるに非ず。靈命は主にして而して形骸は従たり。故に靈命健強なれば形骸は必らず健強なり未だ、羸弱なる靈命を以て而して健強なる形骸を得るものあらざる也。

病苦は形骸の病苦に非ずして靈命の病苦也。靈命の病苦、其形骸に響應せる者也。形骸の病むは病を靈命に負ふの故也。是の故に靈命恬然として無恙なれば斯に形骸は其病苦を容るゝ所無し。靈命の病疾、滅盡するを得ば形骸の痛苦は自ら退散すべき也。

病患の種類、勝て數ふ可からずと雖も、而かも其根源は一として靈命に基因せざるものなし。靈命の發念動作亦未だ勝て數ふ可からず。而して其宇宙

律法に悖違せる所の發念動作は、則ち皆を罪惡にして道徳に背反する者、病患痛苦の根源たらざる者無し。病患の根源に就て之を推究すれば、則ち無智無識より來るものあり。痴疑迷妄より來るものあり。不淨不敬より來るものあり。不孝不慈より來るものあり。怯懦悸怖より來るものあり。懈怠荒廢より來るものあり。暴很凶惡より來れるものあり。僞慢悖戾より來るものあり。懊惱惑想より來るものあり。悲哀怨傷より來るものあり。愧恥羞辱より

來るものあり。淫蕩遊惰より來るものあり。其疾苦の由來する處は甚だ多し。之を要するに皆な是れ宇宙律法の眞理に悖背したるに因て靈命の其罪を獲たるに起因せざるなし。

夫れ諸病の現相は限りなしと雖も、而かも一切の病患は痛苦の状態を表現せざるものなし。大靈命の意思に背悖し、宇宙律法の眞理を破毀したる處には必らず罪惡あり。罪惡の存する處に必らず病患あり。病患の生る處に必らず痛苦あり。痛苦は

靈命の罪に役せらるゝが爲め也。

現世は無休の戦場にして、人生は間斷なき力争也。人は自彊不息の精進努力を以て、悪魔、誘惑、黒闇、不淨、虚偽、一切の罪惡と戦はざる可からず。而して此の力争の人生に於て人は常に眞理の生活に即して、克く精進し克く努力し、修徳奉善、罪を去り邪を遠ざくれば則ち靈命の能力は、愈よ雄大愈よ健剛而して病患疾苦に陥るの憂あるなし。

矣。

人動もすれば輒ち守法攝道の大經に於て漠然として之を置き、進徳修業の要事に於て淡然として之を忘る。安逸に沈溺し荒樂に流連し、邪僻の諸惡に粘染し、而して其中正の大道を信守奉行する能はず。従らに罪業の奴隸と爲つて而して惡因の羈絆を離脱する能はず。之に因て靈命の力愈よ羸弱し愈よ衰頹す。而して病患之に乗じ、疾苦之に生ず矣。此の理を明かにすれば則ち病患疾苦の由て起る所、皆な靈命の威力羸弱にして以て其猛毒を

驅逐し其病惡を排除するに足らざるを知る也。

靈命の威力既に雄且つ健なれば則ち難病惡疾も侵襲冒犯すること無し。故に其疾患を離脱せんと欲せば、其靈命の力をして健強雄大ならしむべき也。

夫れ醫術とは何ぞや。人の形骸の上に發生せる病苦の症候變化の理法を明にするに過ぎず。固より病苦の由て起る所の根本眞理を闡明し得るものに非ず。藥物とは何ぞや。病軀を營養補修するに

適當なる物類に外ならず。其藥物を攝取し收得して而して營養補修の効を奏するものは即ち之を靈命の力に俟たざる可からざる也。醫藥固より缺く可からざる者、其疾患の理法を探究して而して必要なる物類を用て營養補修の効を爲すは則ち可也。然れども醫藥を以て病患疾苦の根本を芟除斷滅し得べしと爲さば則ち誤れり矣。泉流の如く然り。其下流を清うせんと欲せば先づ其源を清うせざる可からず。病苦の本源は靈命の罪に役せら

るゝが爲め也。靈命の源を清うせずして而して其病苦の離脱するを求めんと欲するも豈に夫れ得べけん哉。

病疾は人生の罪業に對する刑罰也。痛苦は徳行を犯せる罪因に應じて得たる結果也。此の結果の故に因て靈命は其能力を消亡し其暢發を障礙せらる。人誰か生を好み死を好まざらんや。然かも人の壽命に長短あり。幼年を以て天死するもの之れ有り。壯年を以て横死するもの之有り。是れ靈命の

威力、罪因の侵奪する所と爲るが故也。

如何にして人は一切の病苦を離去するを得べき歟。

病者は須らく其過去犯す處の一切の罪惡を懺悔し、而して衷情至誠を以て再び罪因を作らざるを決定すべし。

病者は須く端身正行努力精進し、一切の知覺を得て以て病根を排除せんことを期すべし。

病者は須く修法、奉道、布恩、施徳して其靈命の安

易を求め、以て一切の罪障を滅盡せんことを思ふべし。

病者は須く宇宙律法の正明公大なる眞理を尊崇し、以て大靈命の無限絶大なる仁徳慈悲に歸依信仰すべし。

病者は須く一切の諸徳衆善を念起し、一切の衆善の爲めに竭盡すべし。

如是なれば則ち偉大なる威力、靈命の内に湧然として湧發し、其の萎縮垂斃の活力は此に由て而

して挽回せられ、其強烈なる戦闘力は亦當に是に由て繼續せらるべし。形骸は靈命の欲する所に随つて而して營養補修せられ、疾難病苦は將に忽然として退散漸滅に歸せんとす矣。

死後第八

人現世に生れて而して現世を去る。其何れより來りて何れに去るを知らず。何人も過去の自覺無く又來世の自覺を有せず。現世の兩端は黒闇冥冥の中に秘蔽せられ、啻た僅かに現世生活の自覺あるのみ。

人は常に黒闇を恐怖す。是れ明確に了知すること能はざれば也。死は無限の黒闇にして不可解な

りと信ずるの故に人は皆な死を恐怖すること深甚也。

人は常に消滅を悲傷す。是れ自我の亡失するを恐るれば也。死は永遠の亡失なりと信ずるの故に、人は皆な死を悲傷すること深甚也。

人生の來る所以を知らず、人生の逝く處を知らざる者、死を悲傷し死を恐怖するは怪しむに足らず。其の前には無限の黒闇あり、其の後には無窮の黒闇あれば也。

無限無窮の黒闇に介在せる人生の深谷に墜落したる顛倒迷妄の衆生か喚叫煩悶無からんと欲するも豈に得べけんや。人生の罪因は此喚叫の聲也。現世の悪業は此煩悶の影也。

憐む可き者は無明也。悲しむ可き者は無知也。人若し靈命の眞理妙諦に了達せば三世を朗觀して悦樂の光明に安住することを得べし。此に縁て視ざる處を視る可く、此に縁て聞かざる處を聽く可し。宇宙の神秘は之に縁て開闡せられ、人生の謎題

は之に縁て氷解せらる可し。譬喩へば燈火の暗夜を照し、明眼の物色を辨ずるが如し。

偉大にして崇高なる者は靈命の眞理なる哉。此の眞理獨り克く三世を遍照し、以て前世を觀る可く、以て來世を知る可し。是に於て現世の眞意義初めて悟入すべし。此の眞諦を得ば何の處にか人生の煩悶喚叫あらんや。

人は生と共に存在し、死と共に消亡し、其一切の認識を滅盡する者なりと信ずるは迷妄也。人は現

世の末期に於て一切の自我を滅却する者なりと信ずるは懵懂也。此の迷妄懵懂より一切の懊惱煩悶を生じ、一切の哀傷悲憂を生じ、一切の罪業惡因を生ず。死は我が一切の意識を滅するものにあらざる也。死は一切の自我を失ふ者に非ざる也。

人として自我を意識せざる者無し。自我の意識は人の精神活動の中に於て確然不動、最勝強烈なる觀念思想にして、靈命の實在より發動せる最後の力也。而して此觀念思想は終始一貫曾て渝るこ

とある無き者也。吾が五官は象に應じ物に接し、喜怒哀樂の情を發し、好惡愛憎の念を生じ、千變萬化窮極際涯なしと雖も、未だ曾て自我の觀念を滅却する能はず。吾が四肢百骸は化遷變轉して頃刻の間と雖も休止せざる也。昨日の吾が形骸は今日の吾が形骸に非ず。今日の吾が形骸は明日の吾が形骸に非ず。然れども我に一定不變なる者あり、我れに確然不動なる者あり。是れ即ち自我の意識也。此の意識のみ獨り好く一生を通じて變ることなし。

一定不變、確然不動なる者は自我也。自我の本體は即ち是れ靈命。靈命は即ち是れ靈的自我、自我は分解す可からざる精純無雜、單一明白なる意識也。而して此の意識は我に於て最大最高最微の單位にして我が一切を統一し、我が一切を同化する中心精力也。不朽不滅、唯一の實在也。此の靈的自我あつて而して斯に形骸を生ず。形骸あつて而して斯に靈的自我あるに非ざる也。

故に自我は形骸に先つて實在し、形骸を離れて

永く存在すべし。形骸は唯だ自我の意思を化現せんが爲めに營造せられたる機關に過ぎざるのみ。

自我は我が一切を謂ふ也。自我の中には過去幾千萬劫の歲月星霜を経て收得したる幾千萬無量數の一切の經驗力と一切の知識力との全積量を含藏す。然れども自我は必らずしも其の含藏する一切を自覺する者に非ず。自覺は自我の一部にして、自覺我なる者は我が本體の皮相のみ。然るに人常に自覺我を以て誤つて唯一の我が本體となし

却て我に無量数の經驗力と無知数の知識力の自我あるを知らず。譬喩へば自我は海洋の如く、自覺は波瀾の如し。外觀すれば波瀾は海洋を成すに似たり、然れども波瀾の下、澄然淵然たる千尋の曠水あり。波瀾は海洋皮相の小運動に過ぎず。此曠水あつて而して斯に波瀾あり、曠水滅すれば則ち波瀾も亦滅するが如し。

自我を構成するものは我が全意識也。而して自覺我は全自我の皮相にして又全意識の一部也。故

欠

欠

り、斯に悲哀あり。

靈的世界に於ける大靈命の正義は完全に行はる。其賞罰の秤衡は秋毫も誤計せらるゝことなし。現世に成就せられたる一切の德行善業は、盡く報ぜらる可く、一切の罪業悪事は微塵も贖はる可し。諸悪衆罪は消罪滅惡の靈火と靈水に因つて洗盡せられ焼滅せらるゝ迄で、その靈的自我は痛苦より脱する能はず。

善徳圓滿の靈命は其所業の功德に縁て、大靈命

の光明に歡歸し、無窮恒久の生命と共にあつて、無上最勝の安樂喜悅を享くべし。

靈觀第七

眞知は宇宙萬有を統卒する無上大法の眞理を知了し、以て大靈命の無量意思を悟得し、修心誠意提躬檢行、勤力精進、諸惡を遠離し、衆罪を擯絶し、以て靈命の發皇に臻るを得せしむる所以の徳也。

靈觀は直ちに宇宙大靈命を體會し、而して其無量無邊の善公、慈愛、權威、尊榮に歸依渴求して、以て其絶對無限の靈徳の光明恩澤に潤浴する所以の

德也。

靈觀の功德は極めて廣大にして亦極めて深遠也。

之を以て功を論ずれば則ち百千萬億の努力に當るに足るべし。之を以て過を改むれば則ち一切の罪障惡礙を消滅するに足る可し。

靈觀の大徳を享得するは信仰祈願を以て因となさざる無し。信仰の念既に絶大なるに臻れば、願つて而して償はざる無く、求めて而して與へざる

もの無し。夫れ信仰の極致は、誠意誠情、即ち一切の執着を斷絶して死生苦樂の外に超越し惟だ誠、惟だ善、純一無雜、大靈命の光明至徳に隨喜没入する者也。人一度び此の妙域眞境に到達せば、靈昭明覺、大靈命の徳光を享くべし。

譬へば水の如し、狂瀾怒濤既に滅し、濁水溷流亦淨く、寂然として以て靜に、澄然として以て清ければ、天空の月明之を水淵に描くが如し。

靈徳を得るは靈觀にあり。靈觀を得るは信仰に

あり。信仰は何を以て得べきや。

宇宙萬有の眞理大法の言説を聽て、猛然雷霆の耳を震ふが如くして初めて信仰發願の因を爲すもの有り。大靈命の無量意を感得して衷心至情より其義理を思念し、泉の奔湧するが如くして祈願發信の因を爲すもの有り。姑く其動機の如何を問はず、絶對靈命の靈德に絶對歸依し、絶對信奉せば、則ち人に凡蒙愚蔽の論なく、行に劇惡毒邪の論なく、以て滅罪生福し、以て明耀顯赫たる靈光に滋潤

して、其限り無き開達を成就せざることなし。

信仰は徳の本也。是に由て以て一切の疑惑を斷滅し、大靈命の絶對意思を直觀するを得るの故也。

信仰は恭敬の本也。是に因て以て一切の垢濁不淨を滌除し、憍慢剛愎の心を消盡し得るの故也。

信仰は慈愛の本也。是に由て一切の貪婪嗜慾の念を離れ、人に惠施して心に悵む處なきの故也。

信仰は智慧の本也。是に因て以て一切の現相を得入し、迷没より解脫し歡喜愛樂して徳教に入る

を得るの故也。

信仰は精進の本也。是に因て一切の障礙を排除し、修法奉道に其心を堅固ならしむるの故也。

信仰は努力の本也。是に由て以て一切の煩悶悖憂の纏縛を割截し、六情の闇根を消絶し、其正道眞理を悦喜奉行するの故也。

如是信仰は諸行の本源にして衆徳の基礎也。是信仰の念に因て而して靈智の徳を生じ、自制の徳を生じ、勇毅の徳を生じ、健強の徳を生じ、和親の徳

を生じ、同情の徳を生じ、勤勞の徳を生じ、正直の徳を生じ、儉約の徳を生じ、忠誠の徳を生じ、即行の徳を生じ、秩序の徳を生じ、慈愛の徳を生じ、審美の徳を生じ、靈觀の徳を生じ、一切の靈徳之に由て印現して而して來る矣。

驕慢なる母れ、懈怠なる母れ、不淨なる母れ、不義なる母れ、不仁なる母れ、不情なる母れ、怯懦なる母れ、瞋恚なる母れ、愚痴なる母れ、疑惑なる母れ、貪婪なる母れ、染愛なる母れ、矜誇なる母れ、暴很なる母

れ、邪辟なる母れ、讒害なる母れ、詭譎なる母れ、謗毀なる母れ、虚妄なる母れ、何となれば如是の惡念罪想は皆信仰の徳を危害するものなれば也。

人誰か過ち無からん。人誰か罪無からん。罪過奚ぞ咎むるに足らん。信仰の聖殿靈堂に入らんことを欲求するものは、當に先づ其罪過を懺悔す可し。懺悔の力は其心神を潔淨ならしむる所以也。

極惡劇罪と雖も一旦其過を悔改して而して日夜念念、須臾も懈怠なくんば、罪障を消盡し、禍根を

絶滅することを得べし。是れ懺悔の功德也。

懺悔すれば則ち一切の煩悶を除くべし。

懺悔すれば則ち絶對靈命の慈悲を觀るべし。

懺悔すれば則ち宇宙律法の峻嚴を懼るべし。

懺悔すれば則ち諸徳衆善を勤むべし。

懺悔すれば則ち罪禍脱る可く泯淪免るべし。

懺悔の功德は其れ深甚なるかな。之を以てすれば

千百萬億の罪を消盡し得べし。喩へば百年の垢衣、一日之を洗ひて清淨ならしむるが如く、密雲明

月を覆ふも、霎時雲散ずれば清淨光明を見るが如し。懺悔の力を以て而して其罪業を斷滅するも亦復た是の如きもの也。

懺悔の心生ずれば、則ち祈願の念亦之に隨て湧然として發生す焉。祈願は罪過を悔改めて而して絶對靈命の無量威徳の救援を哀禱するにある也。大靈命に最勝の慈悲あり、最勝の仁愛あり、最勝の權能あり。其罪を懺悔して其救済を呼籲せば、則ち其祈願に應じて而して與へらる可し。祈願するも

のは悔改めざる可からず。懺悔の念深甚なれば則ち祈願の力も亦深甚也。悔懺なき祈願は眞の祈願に非ず、祈願なき懺悔は眞の懺悔に非ず。懺悔と祈願は固より相俟つて而して相生ずる者也。

是の故に懺悔する者は、清淨無垢の心を以て發願す可し。一切の愛憎憂樂の念を遠離し、渾身の力を竭し以て滅罪を祈禱すべし。一切の煩惱妄想を去て、大靈命の絶對無限の靈徳に歸依して、而して其救済を籲求すべし。懺悔の力を以て其心神を潔

淨し、其諸惡を滅盡し、其罪因を消散したる時、祈願の力を以て一切を奉獻し、絶大靈命の大徳大權の救を哀願祈求したる時、我れ迺ち圓滿具足の信仰の妙光靈氛に充滿し、吾が靈命は即ち無上最勝の威徳を得て、悠久永遠の歡喜愛樂を受得すべき也。罪業の呵責に懊惱する者、悲哀の境地に沈淪する者、悪魔の誘惑に翻弄せらるゝ者、黒闇の迷路に墮落する者、人世の努力に困憊する者、惡疾沈痾の苦疼に呻吟する者、一切の顛倒迷妄の衆生は、皆な

來つて大靈命の信仰に入り、以て無上最勝の救濟贖罪を得て、無量永劫の苦惱憂結を離れ、普遍の光明と無窮の悅樂を享けよ。

(完)

昭和十年十月十四日印刷
昭和十年十月二十日發行

靈命觀
定價壹圓

不許
複製

東京・小石川・大塚仲町四一
電話東京八二四九八番
大塚三六八九番

言海書房

著者	松本君平
發行者	東京市小石川區大塚仲町四一 西見茂
印刷者	東京市小石川區水川町六二 生方正男

最上印刷所印刷
星製本所製本

MAGNA EST VERITUS ET PREVALEBIT

徳教

新時代の新しき宗教
松本君平の祖述

本書四版八四・金銀色ザグスロ美製・假名付
函入・定價圓貳拾錢・送料拾錢

人類の精神革命 これが徳教の使命

新しき人生の創造へ

世界人類は、長い間、既成宗教や唯物思想のあやまつた
信條の蒙つた青年の指導は、成るに代り、新しき精神
幸福の義を宣傳するの原動力として、世界人類の救済
生活の指導をなさしめ、その目的は、人類の幸福と
の躍るをなすことである。その目的は、人類の幸福と
使企圖するが、人間の生活は、その目的を達成する
對する見方が、異なると、その目的も、人類の幸福と
りよかる。民族の復興、生活の向上、社会の建設、
強く、美しく、健康な人生を築く。此の理想は、現代の
もの、強きもの、健康な人生を築く。此の理想は、現代の
も、強きもの、健康な人生を築く。此の理想は、現代の
れ、病めるもの、強きもの、健康な人生を築く。此の理想は、現代の

社団法人青年教團總務處

賜天覽

青年の新理想

定價七十
錢送料共

松本君平著

高き理想は高き人間を造り、大なる理想は大なる國民を作る。此の著は現代青年の爲めに新理想を説くもの。此の理想によつて現代の青年を改造し、社会、民族の新建設を成就せんとするもの、著者の志を見るべし。

徳富先生より 著書御惠投多謝、不相變、清雄卓抜の御識見、敬服々々云々

松本仁兄大人

徳富猪一郎

米山先生より 采翰に接し同時に御惠投の青年の新理想一卷相受け、老兄の抱負は之を窺ひ居るも更に此書によりて詳かなるを得申候、青年教團の大成を祈上候、獨り青年と云はず文化の建設之を眞個に國民に感ぜしめ度ものと存候 敬具

松本老兄

米山梅吉

社団法人青年教團總務所

東京・麹町區内山下町一ノ一
電話・銀座・二一五・二一六番
振替・東京・三〇五五〇番

青年教團大要

青年教團は明治四十三年秋、松本君平先生の創立した新らしき精神運動である。先生夙に古今學術の蘊奥を窮め、東西文華の精髓を修め、名利の外に超然として常に救世済民を念とせらる。曾て五度歐米を歴遊し、東西の大陸を跋涉すること十餘年、時に朔北の雪に伏し、時に南奥の風に掃り、北馬南船、徳々として寧日なかりき。

明治四十年、先生雄圖を抱いて外蒙古に入り、風塵大漠の中に驅逐する年餘、偶々西大后崩じ革命の洪水將に殺倒せんとして清朝三百年の社稷風前の燈びに似たるの秋沈々たる星夜獨り帳中にあつて潜念苦慮遠く思を東亞の前途に馳す忽ち天來の響を聞く心胸頓悟あり。呼んで曰く「アジアの運命は遂に一大教團の興隆に待たずんば救ふべからず」と已にして重患に落ち病苦三年具に辛酸を嘗め、幾度か生死の關頭に立つて轉々決意固く、遂に一大靈觀を得て教團を富嶽の南、静岡に興し郷黨の子弟三萬人を得たり。爾來日本に朝鮮に滿洲に支那に南洋に到る處法幢を樹て、青年を集め教團の信條を宣布し、救世の理想を説く。先生の行く處常に風雲の起るを見る。先生また學校を興し青年子弟を教養し、又多年力を政治の革新に致せり。その教壇に立つと政壇に立つとを問はず、説く處常に宗教的猛火の烈々たるものあり先生常に嘆じて曰く、「今日アジアは神形共に衰亡に瀕し廢頽荒涼の山河、墳墓の觀をなすものは全くその宗教的教義の缺陷に基因す。その社會民族の智徳、精力、理想の荒廢決して偶然にあらず。」

アジアの復活は清新雄健なる新政權の興隆と眞理の靈觀によるのみと、青年教團の教理と信條は即ち此の要望に應ずるにありて教團の使命また實に茲に存すと云ふべし。過去二十五年、青年教團は現代の青年に高遠の理想を提唱し、アジア十億萬民衆の指導と精神的革命を叫び、信仰的改造を唱ふるものなり。今、世界變轉の秋に際し、極東の風雲また急なるものあり。時代の要望は更に教團の進展に期待するもの甚だ多きを信す。

青年教團の目的的事項の達成を期す

- | 支組 | 事業 | 團員 | 創設 | 法人許可 |
|----|----|----|----|------|
| 一、 | 一、 | 一、 | 一、 | 一、 |
| 二、 | 二、 | 二、 | 二、 | 二、 |
| 三、 | 三、 | 三、 | 三、 | 三、 |
| 四、 | 四、 | 四、 | 四、 | 四、 |
| 五、 | 五、 | 五、 | 五、 | 五、 |
| 六、 | 六、 | 六、 | 六、 | 六、 |
- 一、智識を増進し理想の向上を成就する事
 二、心身を健強し士氣の充實を成就する事
 三、疾苦を救濟し博愛の精神を成就する事
 四、經濟を開發し厚生の利生を成就する事
 五、徳行を修養し眞理の生活を成就する事
 六、徳行を修養し眞理の生活を成就する事
 七、民衆を教化し人生の開達を成就する事
- 明治四十三年十一月
 大正八年六月内務大臣、文部大臣より許可せらる
- 一、普通團員 年額一圓を納むる者
 二、特別團員 一時金三十圓以上寄附したる者
 三、名譽贊助團員 功勞ある者及一時金百圓以上寄附したる者
 一、雑誌、新聞、圖書の刊行
 二、講演會、講習會、慰安會、懇話會、遊説の開催
 三、會館、學校、圖書館、寄宿舎、病院、診療所の設立
 四、防貧、共濟事業の施設
 五、社會公益に關する事業の獎勵援助
 六、其他目的を貫徹する必要な施設
- 民法の規定による。團長は團員總會に於て選舉す。理事、監事、商議員、教務委員、團務委員、顧問を置く。支團分團の規則は教團本部の定款に依る。各地に支團分團を置く。支團分團の規則は教團本部の定款に依る。

社団法人青年教團總務所

一ノ一町下山内・町總・京東
 番六一二・五一二・座線・電話
 番〇五五〇三・京東・替振

近時の悪風潮はさまざまのインチキな類似宗教が出て来て、やれ何々の神の告げだ佛の告げだ、と盛んに迷信を鼓吹し、奇蹟を云ひ振らしして病人を捜し廻つて病氣を治すと云ふことが流行して来た。甚だしきは株式會社の宗教團體がある。迷信を加味した偽瞞で世を欺き人を偽るあさましき世の姿を見る。

此の書を普く天下の病に苦しむ人々に捧げる

病より救はるゝ道

一名病の哲學

松本君平著
定價五拾錢

病の起るのは起るべき原因があるのだ。病の治るのは治るべき原因を作らなければならぬ。それは病についての哲學——根本の道理を覺ることによつてのみ完全に病が治療されるのである。奇蹟や迷信によつて病を治さうといふ事は、無智も甚だしい。病の哲學を知ること、困難な事ではない。一たび其原理がわかれば暗夜に燈を得たる如く、あらゆる難症苦病も解消する。インチキ宗教の欺術も偽技も施す餘地がなくなるであらう。

◆醫學ヒボリタス曰く、眞に神に近きものは哲學者にして治病を知るものである。
◆哲人アリストテレス曰く、人體の健康と疾病の根本智識を持つものは眞の哲學者である。

町下山内區町麴
所務總團教年青 法社 所行發

北村佳逸著

儒教哲學解説

支配者の威力に依る霸道政治を斥け、帝堯の王道政治を提唱したのが孔子の儒教であり、儒教は由來佛敎と並んで東洋の二大哲學と第一の人心の趨附する所となつた。本書は我國儒敎研究に於ては正統著者たる著者が多年研究の結晶で、江湖の諸賢に必齎出來る好菊判三〇〇頁上製 新刊 定價貳圓 送料十錢

北村佳逸著

孔子敎とその反對者

孔子は在世當時已に三千の弟子に圍繞されてゐたが、没後其説の爲に苦悶した儒敎徒の眞摯さは恐らく佛敎徒や基督教徒の以上のものがあつたらう。然し孔子の存在が大であるだけにその影も亦大きい物があつた。影とは？それは孔子敎の反對者の謂である。菊判三〇〇頁上製 新刊 定價壹圓五拾錢 送料十錢

松本君平著

靈命觀

本書は宇宙の根源たる靈命に就て著者半生の體驗に基づく、深き哲學觀より割出されたものであつて、其透徹したる頭腦と固き信念は人間の實質、生命の真相、宇宙觀の把握等に關しても既成宗教の迷妄を排し現代人の心奥に徹底した世界觀を與へずには措かないものである。四六判二二〇頁上製 新刊 定價壹圓 送料十錢

丸岡英夫著

武士道敎本

これあるが爲に今日の日本を成した大和魂——武士道精神の發揚に花と散つた先哲師賢の言行録を收めた體系を與へて其傳記と時代とを解説したのが本書である。收錄氏名——山鹿素行、室鳩巢、時藤拙堂、大道寺友山、吉田松陰、眞木保臣、橋本景岳、平泉澄(文藝博士)等 四六判三〇〇頁美本 新刊 特價八拾錢 送料十錢

丸岡英夫著

日本婦道の眞諦

武士道精神は男子のみの占有物ではない。男子をしてその精華を發揮せしめた裏には必ず賢母があつた。本書の第一編は婦徳となつた女性の逸話を時代順に集め第二編は其等女性の精神修養の糧とした敎訓書の原文に註釋を加へたもので武士道讀本の姉妹編である。四六判三〇〇頁美本 新刊 定價八拾錢 送料十錢

早稻田大學講師 嶋山青峰著

子規・紅葉・綠雨

規は革新の大事業を成就して去つていつた。その子規が遺した正岡子規句集の如何に推移して行つたかを詳に併せて尾崎紅葉、齋藤綠雨の俳句を子規との交渉連關の下に研究、蘊蓄を傾けたのが本書である。
四六判三二〇頁上製 新刊 定價壹圓五十錢 送料十錢

「家の光」マナージャー 馬場光三著

生活と雑誌

雑誌は新聞と單行本との間にあつて最も親み易い機關である。そこに雑誌の近代性があり個性生命がある。本書は雑誌の人生に對する交渉を説き其効用を明にし様々の點から觀察記述した我國最初の雑誌研究書である。
四六判二一〇頁フランス製本 新刊 定價八十錢 送料六錢

童話研究主幹 蘆谷重常著

童話學十二講

開卷童話の語義概念を明詳にし童話が次で發生し發達し分化し類型を生じた徑路を訪ねる。童話を本質的に文化史的に學ばうとする者の必讀すべき好著である。
四六判三二〇頁上製 新刊 定價壹圓五十錢 送料十錢

和歌研究家 横尾 豊著

新古今時代詳説

「古今」の歌人が花月風流の雅懷を正叙したに對し「新古今」の歌人は曲情を曲抒した。それ丈眞義を捕捉するに苦しむ。本書は之に對し周到な合理的解釋を下しその時代を説明して近視眼流に眼鏡を鼻へて怪物名歌の正體を見極める方法を教へたものである。
四六判三〇〇頁上製 新刊 定價壹圓二十錢 送料十錢

日本文學研究會編

日本文學作家辭典

古事記の幼稚な歌謡に出發した日本文學を今日の水準にまで盛上げて來た歌人小説家其他幾千の人々をその事業と時代及び凡ゆる方面より研究簡明な解説を施し五十音圖に排列してあるから文學に關心ある者は是非一冊は具へておくべき辭書である。
四六判三五〇頁上製 未刊 定價壹圓五十錢 送料十錢

安藤徳器著

歴代内閣物語

名は内閣物語であるが事實は生きた憲政史で維新前後から現内閣に至る迄の政治的、社会的、経済的、時勢の推移を説明し歴代内閣の變遷及び各大臣の手腕功罪を語り、記述の詳細資料の豊富等肩のこらぬ政治経済外交の趣味的參考讀本としても重寶である。
四六判三六〇頁上製 新刊 定價壹圓五〇錢 送料一〇錢

安藤徳器著

陸海軍今昔物語

本書は歴代内閣物語とは別個に維新以後の國史の側面を語るもので、織羅星のそれにも似たる陸海軍將星の人物記を中心とし、軍部の組織、軍旗、勳章に絡る種々の秘話を始め武器の變遷、軍艦の遭難史、大戦役と幾多の事變の顛末、等を叙し最後に國際聯盟と軍部の關係物語を以て結ばれてゐる。
四六判三三〇頁上製 新刊 定價壹圓五〇錢 送料一〇錢

寺島征史著

世界兵器物語

軍縮の假面を一枚剥ぐとそこには世界列國の秘密兵器がズラリと額を列べてゐる。科學が物を云ふ將來の戦争にはどんな物が飛出して來るか、著者は之等各國の秘密を暴露し其の正體を吾等の眼前に展開して科學の躍進に目覺めしめ併せて讀書的興味をも横溢させてゐる。
四六判三五〇頁上製 未刊 定價壹圓五〇錢 送料一〇錢

アプトン・シンクレア著

聖林爆撃

「フロイド・デル」は之は恐るべき本だ：と私は思った。私は徹夜で讀破した。私はかくも興味と昂奮に充ちた本を讀んだ事が無い。映畫の金融者と企業者との闘争はアメリカ産業史に新重要材料を加へた。シンクレアは又もやアメリカ第一の作者たる賞讃を得た。
四六版六五〇頁上製 二版 特價壹圓五〇錢 送料一四錢

副島次郎著

アジアを跨ぐ

近き將來實現せんとする中央アジア横斷鐵道の敷設確定地域北京よりイースマンブル間を實地踏査して其間天候地勢、政治經濟、軍事、人種風俗等を研究し他日該交通路完成に依て當然惹起せらるべき此方面の政治經濟的變革に備へんとする貴重なる軍事地理資料である。
四六版五〇〇頁上製 新刊 定價壹圓五〇錢 送料一〇錢

蘆谷 蘆村著

談奇 妬婦傳

本書は妬婦傳とその女夫孺たる妬夫傳から成つてゐる。登場人物は古の東西歴史上の大立物。夫等の人物が人生に於ける暴風雨、性的生活の嫉妬に遭遇して如何に悩み如何に消えて行つたかを著者獨特的な鋭いメスに依つて剔抉した男女裏面生活の貴重なやまの研究書である。

四六判三五〇頁上製 再版 定價壹圓五〇錢 送料一〇錢

三浦義臣譯

支那 小説 封神傳

支那の古代に生起した数々の奇怪な事象は東洋各國に多くの傳説や神話の種を蒔いた。本書は此の神秘幻想の支那古代に於ける三つの中核を酒池肉林の宴に酔ふ殷の紂王と人血を吸ふ妖精妲己と彼等の人物の種々たる民苦を救つた周の武王の争闘史を刻明に描出した名著である。

四六判三五〇頁上製 新刊 定價壹圓五〇錢 送料一〇錢

ヘゲアエヌ作 角岡知良譯

戯曲 殺人犯

「殺人犯」はハンガリーの大文豪ヘゲアエヌの大傑作で作風には東洋殊に日本の古典藝術と一脉相通するものがある。譯者は亦ヘゲアエヌ及びその國情を最もよく理解した人、或は原作以上の藝術的生命的を吾人の胸に躍動させてくれるであらう。

四六判二五〇頁美本 三版 定價 壹圓 送料六錢

豊島 與志雄著

創作集 道化役

収録された創作「道化役」以下「女客一週間」「千代次の驚き」「別れの辭」等十餘篇は數ある氏の創作中でも不朽の名短篇に屬するが而も其等が自らの長篇を構成してゐる。又「椎の木」は之等と口を現して遺憾がない。

四六判三五〇頁美本 二版 特價壹圓四拾錢 送料一〇錢

大井 廣著

歌集 悲心抄

若くして其閃きを謳はれた天才歌人が今や人の子の親となつてその作風に如何なる進展を見せたか、いとしい折に直面して快懐を續けた作者の悲心はやがてその詩囊の淵熱を助け、本歌集となつた。一首毎に見る情熱の深刻さは恐らく啄木以上であらう。

四六判三〇〇頁上製 新刊 定價壹圓五〇錢 送料一〇錢

貴族院議員 竹越與三郎著

明日はどうなる

日本はどうか、明日はどうか。それについて答へたことを骨子とし、之を敷衍して血肉を添へたのがこの書である。内容、現代日本の姿、現今の疾患は新日本創造の努力から來る。内閣、俗を罵る聲、思想の悪化とは、日本の再發見と奪還、生活苦と種々な感情、人類還元の凶烟、その他。

四六判三〇〇頁上製 第二版 特價五拾錢 送料六錢

衆議院議員 助川啓四郎著

農村 更生案

本書は農村經濟の確立を以て眞の日本發展の基と斷じ米穀自治管し紹介したるもの、何れも力の籠つた地方財政補整、金法案等を再吟味確し得難いものであるが、一々實例を農村の現情に就いた論旨は適確、眞摯であつてよく云はんとするところを傳へてゐる。

四六判三五〇頁上製 新刊 定價壹圓五拾錢 送料十錢

大毎、東日エチオピア特派員 庄子勇之助著

エチオピア經濟事情

戦禍の渦中にあるエチオピアを單なる人種感情から同情すること概念は此國の政治經濟事情である。日本人として必ず持たねばならぬ對エチオピアの政治經濟事情である。著者は在エチ三年彼の地の事情に最も通曉した人、記事は精確從來の誤れる對エ觀念を根本より修正してゐる。

四六判一〇〇頁美本 新刊 定價貳拾錢 送料四錢

外務省囑託 今岡十一郎著

ツラン民族とは何か

大アジア民族は幾多の人種を包含するが、その中最も活躍してゐるのにはツラン民族に屬する大和民族である。而してその發祥地たるウラル・アルタイ地方に現在國家を形成せる民族と日本人とは人種的にどんな關係にあるか、本書は數十葉の寫眞と共に之を明かにしたものである。

四六判一五〇頁美本 新刊 定價參拾錢 送料四錢

獨逸經濟學博士 田畑爲彦著

最近伊太利の政治

名譽ある祖國伊太利の興隆を志し、所謂フアツシヨ政治の鐵則に據つて歴史あるローマの政權を掌握、無人の野を行くムツツリニの意氣は正に國際政局に於る脅威である。本書は國際經濟學の權威たる著者がフアツシヨ治下伊太利の全般的政治經濟の實情を忠實に譯述したものである。

四六判二五〇頁美本 新刊 定價八拾錢 送料八錢